

---

# 東方鋤速録

見たら死ぬ死神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方緻速録

### 【Nコード】

N2590K

### 【作者名】

見たら死ぬ死神

### 【あらすじ】

ワーム・ネイティブの戦いから一年。

かつての仮面ライダーガタックⅡ加賀美 新は再び現れたガタックゼクターに幻想郷へ飛ばされてしまう。彼は幻想郷で何を思い、どう生きるのか…

この小説は東方×仮面ライダーカブトのクロスオーバー小説です。そういうのが嫌な人は見ないことをオススメします。

因みに、題名は鋤速と書いて「かそく」と読みます。

## 第一話 カ・ガミが幻想入り（前書き）

どうも。今回は仮面ライダーものに挑戦しました。

別のも執筆してますが、交互に連載していきたいと思っています。

まだまだ素人なので出来れば温かい目で見守ってくれると嬉しいです。

## 第一話 カ・ガミが幻想入り

ZECTとワーム・ネイティブの戦いから一年、かつての仮面ライダー、ガタツクの資格者

加賀美新は東京タワーの下で警官をしていた。

子供達

「「「加賀美！ありがとう！」「」」

加賀美

「気をつけて帰るんだぞー！」

いつもどおり子供達を先導して見送る。最近はこれが加賀美の日常になりつつある。ワームとの戦いに明け暮れていたあの時とは違い穏やかな時間がそこにあった。

加賀美

「ふう。平和だな。皆は何してんだろ。」

一息吐いて加賀美は考えた。あの戦いで生き残った人間もいたし、死んだ人間も沢山でた。仮面ライダーサソード「神代剣も例外ではなく、あの戦いの最中仮面ライダーカブト」天道が倒した。その天道から聞いた話によると死に際はとても安らかな顔だったそうなの。その天道はというと、今頃何処かで豆腐を担いで歩いているんだろう。何となく加賀美には分かった。

仮面ライダードレイク「風間大介も、風の如く何処かで世の中の女性を美しくしてるのだろう。」

加賀美

「おっと、感傷に浸ってる場合じゃないな。仕事仕事…」

そういつて交番の柵を整理する。

すると、懐かしい飛行音が聞こえてきた。

加賀美

「この音は…まさか…」

彼の予測は当たっていた。ガタツクゼクターだった。

加賀美

「ガタツクゼクター…お前何で…。」

使命を終えたゼクターはあの決戦の後どっかに行っただはずだ。それが今頃になって現れたとなると…

加賀美

「もしかして、ワームがまだ…！」

しかし、ガタツクゼクターは何も答えず外に飛び出してしまった。

加賀美

「おい！待てって！」

仕方なく追う加賀美。

青年移動中…

そんなこんなで山奥まで来てしまった加賀美。

加賀美

「何処まで行くんだ。ったく。」

少し悪態をつきながらガタツクエクステンダーで追いかける。暫くすると、神社らしき建造物が見えた。ガタツクゼクターはそこで止まった。

加賀美

「ここは一体…」

そこは見る限り使われてない神社らしくボロボロであった。ガタツクゼクターは再び加賀美の前に出て、横に差し込む仕草を見せる。

加賀美

「…？変身しろってことか？分かった。変身！」

【HENSIN】

意図は読めなかったがとりあえず、言うことを聞いて変身する。すると、ガタツクの周りを光が包んだ。

ガタツク

「！？これはハイパーゼクターの！？  
うわあああああ！？」

そして、加賀美 新は消えてしまった。

彼は別の世界へ行ったのだ。人に忘れされし者の集う地。それを全て受け入れる、

『幻想郷』へ…

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
...

## 第一話 カ・ガミが幻想入り（後書き）

どうでしたか？

自分の中ではガタツクも加賀美も好きなので今回主人公にしました。予告ですがその内地獄兄弟とか出すんで、待っててください。

## 第二話 先生、未知との遭遇（前書き）

はい。続いて二話です。初投稿後、400PVも来て嬉しかったです。

この調子でどんどん書いていきます。

今回は東方キャラを出します。東方キャラはディープには知らないけど、知識を集めて頑張ります。  
では、どうぞ。

## 第二話 先生、未知との遭遇

幻想郷：そこは理想郷と呼ばれし場所。或いは人間が幻と呼びし者、妖怪・神・魔法使いが流れ着く場所。

そこでは人間も住み、神は人々の信仰を集め崇める対象として、妖怪は人間を襲い恐怖の対象として存在している。魔法使いも魔力の在るところに住み、人間を辞めて魔法使いになる。

この広い幻想郷の一角にある寺子屋。そこから話は始まる。

A . m . 1 1 : 3 0

朝、この時間には寺子屋は始まって暫くたつていて子供達が畳に座りながら授業を受けている。

前で教えている長い銀の髪をしていて帽子を被っている彼女は上白沢 慧音。

慧音

「さて、これはどう読むんだ？」壁に書かれた漢数字を指して生徒に問題を出す慧音。

生徒A

「んゝ…わかりませ〜ん。」

困りながら音を上げる生徒に微笑みながら教える。

慧音

「これは、二万九千八百六十五と読むんだ。」

生徒A

「はい。」

書物に書きながら返事をする生徒。  
部屋にある古時計を確認して一言。

慧音

「今日はここまで。今日やった所は宿題にするからやってくるんだぞ。」

生徒達

「「「はい!」「」」」

切り上げる生徒達。それを見届けて安堵の息を漏らす慧音。

慧音

「さて、寺子屋も終わったし妹紅も待つてる。迷いの竹林に行くか。」

そういつて支度している。

どうやら友人と約束があるらしく、これから迷いの竹林に行くそう  
な。

そして外に出て、宙に浮き始めた。

ここでは珍しい事では無いらしく、妖怪やら神は空中浮遊はお手のものらしい。因みに、慧音も妖怪でワーハクタクと呼ばれる半人半妖である。

一人空を飛ぶ慧音。周りには広大な幻想郷の景色。色とりどりの自然がそこにあつた。だが、何処からか悲鳴がした。

慧音

「誰だ?下からでもない。じゃあ…」



「おい。大丈夫か？」

????

「~~~~~つててててて！何だよここ！？……ん？君は…人？」

どうやら話せるみたいだ。そう考えた慧音は質問してみる。

慧音

「私は上白沢 慧音。君は…人間か？」

そこまで言つと。慌てた様子を見せる。

????

「あー！ごめんごめん！これで初対面じゃ人間なんて分からないよな。今、『変身』解くから待って！」

そう言つと前に付いているレバーを右から左に戻して取った。すると、六角模様が出て中から人が出てきた。

????

「俺は加賀美 新。こいつはガタツクゼクター。」

彼の回りを飛んでいる鍬形虫の様なモノがガタツクゼクターなのだろう。

加賀美

「所で、ここは何処なんだ？」

その言葉に目を見開く。

慧音

「君はやはり外来人か…。」

腕を組ながら考える慧音に加賀美は疑問符を浮かべる。

加賀美

「え？外来人って？」

慧音

「とりあえず、今言えることは…ここは君が住んでいた世界ではない。ここは幻想郷と呼ばれる所だ。」

加賀美

「え…つまり別の世界…って事か？」

慧音

「そうだな。今はその解釈でいいよ。とりあえず、ここで話すのも難だ。これから私は友人の家に行くんだが一緒に来てはどうだろうか？」

加賀美は少し考えて答えた。

加賀美

「この場所も分からないまま何処に行くのも危険だしな。お言葉に甘えるよ。」

慧音も頷き、

慧音

「分かった。じゃあ、私に付いてきてくれ。」

これが、加賀美と慧音の最初の出会いとなった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

## 第二話 先生、未知との遭遇（後書き）

とりあえず、慧音先生出しました。

加賀美との接点は余りないですがカブトのラストの子供が戯れる加賀美を見て思い付きました。

第三話 スキマ現る そしてもう一人… (前書き)

どうも。

いやはや、最近更新遅くてサーセン。

DXゼクター探してたなんて人には言えry(ピチューン

ともかく、書くには手は抜きません。

それではどうぞ。

### 第三話 スキマ現る そしてもう一人…

ここは迷いの竹林。幻想卿の一角にあつて一度入ると抜け出すことが難しい所で有名だ。

案内なしでは行けない所のその奥を二人が歩いている。そして、暫くすると一軒の木造の家が見えた。

慧音

「着いたぞ。ここが私の友人、藤原 妹紅の住む家だ。」

慧音はそのまま玄関に行き、戸を叩く。

慧音

「妹紅。私です。」

妹紅

「お、来たか。…て人間連れてきたのか？」

慧音

「彼は外来人だ。名前は…」

加賀美

「加賀美 新です。よろしく。」

挨拶を済ませると手を差し出す。他の二人はそれを見て驚いている。

加賀美

「え？何かおかしいか？」

慧音

「……君は異世界にいるのに警戒心は無いのか？」

確かに何も見知らぬ土地で普通の人なら警戒してむやみに名乗ったり友好的にはしない。だが、目の前の男はそれをやっている。慧音は不思議で仕方なかった。

加賀美

「あ、いや、別に悪い人でも無さそうだったから……それに敵意も無いのに警戒してどうすんだよ。」  
それはそうだが……と慧音が言うが、

妹紅

「はいはい、とりあえず家に入って入って。話はそれからだ。」

妹紅がそれを遮り二人を背中から押す。

青少年少女移動中……

奥まで進むと居間があった。三人はそこに座り込む。

妹紅

「ちょっとお茶を入れてくるよ。」

加賀美・慧音

「おっ、サンキュー。」「ありがとう。」

しばらくしてお茶がくる。それを一口。

加賀美

「旨いなコレ。」

それを聞いて妹紅が照れた風に頭を掻く。

妹紅

「そうか。よかった。」

そして、その後加賀美は自分の世界の事を話した。ワーム・ネイテ  
イブの宇宙人の襲来、渋谷隕石、マスクドライダー計画、自分がそ  
の仮面ライダーであることを…。

二人も初めは驚いていたがその後は、話を聞いていた。

慧音

「なるほど。で、加賀美はそのガタツクゼクターに導かれてここま  
で落ちてきた、ということか。」

加賀美

「まあ、そう言うことかな。それで戦いが終わった後は警官。」

懐から警察手帳を取り出す。

妹紅

「ふん。外界ではそんなことがねえ…。」妹紅は何か意味深に聞  
いていた。それもそのはず、彼女も元は外の間人である。

慧音

「まあ、君の世界については分かったがこれからどうするんだ？こ

のままって訳にもいかない。」

加賀美

「そうだな…元の世界に帰りたいとこだけど、方法がなかったら暫くはこつちの世界にいるかな。だけど、住むところがないんだよなあ…。」

加賀美自身今は家の無いホームレスと同じだ。聞いた話によると、夜の幻想郷は人喰い妖怪が出るそう。野宿なんてもつてのほかである。彼自身はまずガタツクに変身できるので簡単に逃げれるが、沢山いたりしたらジリ貧もいところだ。

慧音

「それなら…」

???

「心配ありませんわ。」

三人

「「「!?!?!」」」

声のする方を振り向くと、妙な隙間から上半身を出している艶やかな女性がいた。

???

「彼は慧音、あなたの家に住ませなさい。」

慧音・妹紅

「「八雲 紫!?!?!」」

加賀美

「え？どちら様？」

状況を理解出来ない加賀美に慧音が説明する。

慧音

「この人は八雲 紫。幻想郷を管理している人と思ってきていい。あと、スキマ妖怪。」

紫

「その通り。さて、加賀美 新。あなたは幻想郷を見て回りなさい。これは管理者としての命令です。」

持っていた扇子で顔を隠しながらいう。しかも微笑みながら。この時点で誰もが思う。『胡散臭ry』ピチューン

加賀美

「拒否権は無いみたいだな。まあ、動かないと始まんないから…よし、その話乗った！」

紫

「ふふ。潔いわね。噂通りだね。あと、あなたにはもう一つ頼みたいことがあるの。」

加賀美

「頼みたいこと？」

紫

「幻想郷に近づく異形。それを退治して欲しいの。」

それを聞いて加賀美は驚いた。

加賀美

「まさかワームが…！」

紫

「そうね。ホントなら私一人でも何とか出来るけど、面倒だからあなたに頼むわ。」

それに妹紅が反論する。

妹紅

「ちよっと！加賀美一人に任せるのは…！」

紫

「あら、ライダーシステムはワームを倒す為にあるんではなくて？」

妹紅

「う…確かにそうだが、だが大群でも来られたら加賀美一人で大丈夫なのか!？」

加賀美

「何だよそれ。まるで俺が弱いみたいじゃなか。」

妹紅

「あ…その…済まない…。」

加賀美

「ははは。いいよ。そんなこと。」

その間で紫が口を挟む。

紫

「何もライダーシステムは一つじゃないですわ。」

加賀美

「！？俺以外の装着者もいるのか!？」

そこで紫はニコニコしながら言う。

紫

「私はこれ以上は言えませんわ。百聞は一見に如かずってことわざがあるでしょう?自分の目で確かめてきなさいな。」

加賀美

「む…ん…分かった。」

何か上手くはぐらかされた気がしたが、駄々をこねても聞けなさそうなので諦めた加賀美だった。

慧音

「とりあえず、今日から私の家を起点に幻想郷を見て回れ。そういうことだな?八雲 紫。」

紫

「そういうこと。じゃあ、よろしく頼むわね。」

あ。一ついい忘れたわ。加賀美。」

加賀美

「何だ?」

紫

「幻想郷は全てを受け入れる。それはとても残酷なことすわ。」

意味深な言葉を残して紫はスキマの中に消えていった…。

その後、話があつた通り慧音の家に住むため妹紅と別れて人里まで向かった。

これから何が起こるか分からないが、せめて自分の周りの人ぐらいは守ろう、そう誓う加賀美だった。

P . m 20 : 00

幻想郷にも夜が来た。

ここは魔法の森。夜は妖怪や妖精が沢山徘徊する時間である。普通の人なら近寄る筈のない所。そこに一人、倒れた人がいた。

???

「……ここは……？」

ゆっくり起き上がったそれは、辺りを見回して言う。

「……？」

「あの時…僕はボクを助けて…それで…」

独り言を話していると黒い球体が近づいてくる。

「……？」

「ねえ。あなたは食べ物でもいい人類？」

「……？」

「僕のこと？人は美味しくないから止めた方がいいよ。」

「……？」

「………いただきます。」

「！？」

とつさに身構える。しかし球体が近づいてくる前に何か横切つて球体に攻撃した。それを手に取る。

思い出した。これは僕のカプトゼクター、僕はあの人に擬態したネイティブだ。

「……？」

「きゃうー！」

黒い球体から何か弾き出された。女の子だ。頭にリボンをしている。

「……？」

「うー。失敗したのだー。」

拗ねたように言う女の子。

???

「君の名前は…?」

???

「ルーミア。あなたは何なのだー。」

???

「僕の…名前…。」

言葉が詰まる。名前など大したものが無かった。だけど、記憶にはあった。必死に名前を紡ぎ出す。そして出てきたのは…

???

「僕は…日下部…総司…。」

ルーミア

「そうなのかー。よろしくなのだー。総司。」

日下部

「よろしく…ルーミア。」

こうしてダークカブト。日下部 総司は幻想郷に降り立った。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
...

第三話 スキマ現る そしてもう一人… (後書き)

如何でしたか？

この小説は、加賀美&日下部こと擬態天道をW主人公にして、話を進めて行きたいです。

日下部君は天道の顔なので、少し犯罪くさいことry(さあ、お前の罪を数える！

戦闘シーンは後少し先になりそうです。

感想ならアドバイス、クレームどちらも受け付けておりますので是非！書いてってください。

## 第四話 弱さと強さ 守るもの(前書き)

今回は戦闘シーンあります。下手くそだと思えますがよろしく願います。

#### 第四話 弱さと強さ 守るもの

幻想郷にも人はいる。もちろん、外との文化も違う。博霊大結界によつて隔離された時の文化は明治初期成り立てだ。

それに加えて、幻想郷には神も妖怪も人の身近に存在している。それによつてここでは独自の文化が出来てしまっている。人は純粹に妖怪を恐れ、神は人に崇められている。

さて、何故このような話をしているかと言つと…

人里にたどり着いた加賀美はここで異様な光景を見ていた。大の大人が子供？みたいなのに追いかけられる。

その子供は何やら手から冷気のようなものを出して氷を放っている。背中には翼らしきものが立っている。

加賀美

「あれは…何だ？」

慧音

「あれはチルノという氷の妖精だ。」

そう言いながら、チルノに歩み寄っていく。心なしか怒っている風にも見えた。

慧音

「チルノ！何をしている！」

チルノ

「げっ！上白沢 慧音！？戻ってきたの!？」

慧音

「その口振り、やはり私がないのを狙ってか…。  
ゆるるさん！！！」

どこぞの太陽の王子に聞こえたのは内緒だ（笑）

チルノ

「あたいは最強なんだ！！あんなにか倒してやる！」

加賀美

「っておい！止める！人いるだろ！」

二人は聞くまでもなく弾幕を発射する。もちろん人は逃げ惑っている。

加賀美

「しょうがないな。ガタツクゼクター！」

ガタツクゼクターが飛んできて加賀美の手に収まる。

加賀美

「久しぶりだな。変身！」

【HENSIN】

加賀美

「キャスト・オフ！」

【CAST OFF】

【CHANGE STAG BITTLE】

加賀美はすぐさまマスクドフォームからライダーフォームに移行。  
あの弾幕をすり抜ける為だった。右の腰を押す。

加賀美

「クロックアップ！」

【CLOCK UP】

ZECTライダー特有の超高速移動クロックアップを発動。チルノ  
の真後ろに入り…

加賀美

「おりゃ！」

当て身一発。

チルノ

「うっ！」

チルノはそのまま気絶した。

そして、チルノを抱えてその場を離脱。

【CLOCK OVER】

ちょうどクロックアップが終わった時慧音の視界からチルノはいなくな  
った。代わりに後ろにクワガタ虫の様なスーツの人間がチルノを  
抱きかかえ立っていた。

慧音

「それが、君の変身した姿か。」

ガタツク

「そうだ。これが仮面ライダーガタツクだ。それと、もう一言。」

慧音

「？」

ガタツク

「私情があるのも結構だけど、人を巻き込むなよ。」

辺りを見回すと、家が半壊状態が多かった。慧音はハツとなる。

慧音

「あ…私としたことが…」

頭を抑えながら恥ずかしそうにする慧音

加賀美

「ちゃんと分かればいいって。で、この子どうする？」

そう言っただけ抱えているチルノを見る。

慧音

「そいつは少しお仕置が必要だ。家に連れていこう。」

あと…被害を受けた家の人に謝らなければ…。」

暫くは被害者達に謝罪しに行った。みんな、「いつものことだから。それより妖精を退治してくれて助かった。」と、喜んでいた。

そして、慧音宅。

普通の家に比べて結構デカイ。まあ、寺子屋をやっているから当たり前前かと自分の中で答えを決めて、家に上がった。

居間に腰を下ろして、チルノを下ろしゆする。

加賀美

「おい。大丈夫かー？」

チルノ

「う…ん…あんただれ？」

加賀美

「俺は加賀美 新。ここは…」

慧音

「チールーノ…」

チルノ

「はう！？」

慧音

「私が留守の間によくもやってくれたな？覚悟は…良いか…？」

加賀美

「け…慧音…？」

これには流石に加賀美もびっくり。

チルノ

「ひゃあああああ！？」

チルノの肩を掴みながら頭を後ろへ…

チルノ



「何さ？」

加賀美

「どうしてチルノは最強になりたいんだ？」

チルノ

「どうしてって…最強にならないと…」

そこで歯切れを悪くするチルノ。少し黙って言った。

チルノ

「最強にならないと…最強にならないと、みんなが認めてくれない！…から…」

加賀美

「え？」

チルノ

「私は、氷の妖精…。触れるものは全部凍っちゃう…。みんな近寄らない…。でも！最強になれば！みんなが認めてくれる！近寄ってくる！そう思ったから…」

涙目になりながら話すチルノ。

その答えを聞いて加賀美は昔ZECTにいた頃を思い出した。

ワームを倒す。それだけの為に入った。しかし、自分がるはずのライダーはゼクターごとある男に奪われた。

その時、組織の中で自分の居場所が無くなった気がした。

それからだ。あの男を追っかけ回し、がむしゃらに生きていたのは。そして手に入れた『力』。これが自分だと存在を証明できる力。

それを思い出して加賀美はチルノを見た。昔の自分に似ていたからだ。

納得した加賀美はその話をしようと考えた。

加賀美

「なあ、チルノ。今から言う話を聞いてくれ。」

チルノ

「何？」

加賀美

「昔俺も最強になろうとしたことがあったんだ。」

チルノ

「えっ!？」

加賀美

「俺はその時侵略者と戦う組織にいて、そいつらを倒す為に最強になろうとした。」

そう言っただけで一旦ガタックゼクターを呼び出して手に取り、チルノに見せる。

加賀美

「これが最強になろうとした時に求めた力の一つだ。」

チルノ

「…」

加賀美

「最初はこれじゃないカブトムシの奴を使おうとしたんだ。だけど、初任務で変身しようとしたら、盗られちゃったんだ。」

チルノ

「誰に？」

加賀美

「天の道を往き総てを司る男。みんなはそう呼んでる。」

チルノ

「天の道を往き総てを司る男…」

加賀美

「俺はそいつにゼクターを奪われた。とは言っても、元々奴の物だったんだ。」

「ただ、俺は組織から居場所を無くしたんだ。」

チルノ

「（あたいと…似てる…）」

ここでチルノは目の前の男が自分と似ていることを理解した。

加賀美

「それから俺は組織で頑張った。がむしゃらに。あの男の背中を追かけた。貪欲に。そして手に入れた力がこれだ。」

もう一度ガタツクゼクターを見せる。

加賀美

「こいつを手に入れた時、最強になるとかそんな気持ちはどこかにいった。」

この力で俺の身近の人を守る。そのために力を使った。」

チルノ

「うん…。」

加賀美

「いいか、チルノ。確かに居場所を作る為に力を使うのは悪いことじゃない。だからと言ってそれを振り回せばただの暴力だ。その力を自分にじゃなくて誰かの為に使えてこそ、本当の最強になるんじゃないか？そして自分に居場所ができるし、みんなはお前を認めてくれるんじゃないか？」

チルノ

「!?!？」

何かを理解したかのように目を見開く。

チルノ

「うん。分かった。あたかも、友達とかの為に力を使うよ。」

その言葉に微笑む加賀美。

加賀美

「そうか。まあ、聞いた話によると、妖精はここじゃ人の恐怖の対象にならないと存在し辛いから人を襲うのは…アリかな？」

チルノ

「何それ？おかしくない？」

加賀美

「そ、そうか？」

チルノ

「ふふ、あはは。」

いきなり笑うチルノに驚く加賀美。

加賀美

「何だよ、馬鹿にしてんのか？」

チルノ

「違うよ。人間に説教されるなんてね。それに、人間の中にも変わった奴がいるんだあって。」

微笑みながらそんな言葉を口にする。

妖精と言う立場上人間に恐怖されなきゃならないのに、この人間は恐れることもなく、近付いてきた。逆にそれは彼女にとっても嬉しいことであつた。

チルノ

「今日からあんたはあたいの友達。よろしく加賀美。」

起き上がって手を差し伸べる。

嬉しそうに手を差し伸べる加賀美。

加賀美

「ああ、よろしくチルノ。」

その頃慧音は、

襖の隙間から二人を見ていた。

慧音

「ふふ。どうやら八雲　紫が彼をここに置く理由が分かった気がする。」

一人納得したかのように自室に戻る。

そして、部屋の中で自分の能力を行使する。

彼女の能力は

「歴史を作る（食べる）程度の能力」

それを使い『異形』の歩いた『歴史』を『見る』。

その標は人里へと向かっていた。

慧音

「やはり人里に…彼にも応援を頼むか…。今はまだ程遠い距離だ。

明日も早いし寝よう。」

異形はすぐそこまできている。果たして加賀美は守ることができるだろうか？

未来は誰も分からない。

日下部 side

その頃日下部　総司は森を歩いていた。何故か後ろにはルーミアが付いてきている。

日下部

「ここは…どこなんだ？」

ルーミア

「ここは幻想郷なのだー。総司は外来人なのかー？」

日下部

「そうかもね。少なくともここは僕がいた世界じゃない…。」

その時、日下部はここは死期の世界かと心のどこかで思った。

天道を助けたあの時、自分は根岸を道連れにして爆炎の中へ戻った。

あの爆発でなら普通は死ぬのが当たり前だと思った。

だけど、今でも体に痛みを感じる。

それが意味する事は生きているということだけ。

じゃあ誰が…。それを考えても記憶にはない。

歩を進めようとした。その時、

ルーミア

「!？」

いきなり日下部の後ろに隠れるルーミア。

日下部

「どっしたの？」

ルーミア

「あれ…」

彼女の指す前方には、何やら隙間みたいのがあった。その隙間から一人の女性が出てくる。

八雲 紫である。

紫

「はあい。ご機嫌よう。私は八雲 紫。この世界の管理者ですわ。」

どこか余裕のある、それでもって何かを企んでいるような仕草で話しかけてくる。日下部の本能の警戒心がそう告げていた。

日下部

「あなたは…」

紫

「ストップ。聞きたいことは山ほどあるでしょうけど、とりあえず今は答えられないわ。唯一答えられるとすれば…あの時、あなたを助けたのは私ということだけかしら。」

日下部

「!?!」

紫

「あなたはこの世界を見て周りなさい。それが、今のあなたの為になるわ。」

日下部

「僕の為？」

紫

「あなたの心に聞いて見なさいな。  
それと、あなたの同類もこっちはいるわよ。」

日下部

「え！？それって…！」

紫

「あなたの力『両方』よ。それじゃ、頑張ってね。」

手を振りながら紫はスキマの中へ戻っていった。

日下部

「……………（僕と同じ力…ワームとゼクターか…）」

ルーミア

「総司いー。大丈夫なのかー？」

日下部

「うん…。大丈夫。」

ルーミアも…大丈夫…？怖がってたけど。」

ルーミア

「うん…。あの妖怪は怖いけど、総司がいたから怖くなかったのだ  
…。」

ルーミアは再度抱きつく。怖れを無くしたい様に。

そんなルーミアが日下部は一瞬ひよりと被って見えた。あの時も何も  
ない自分に妹がいると知って喜んで、今もそんな気持ちだった。

日下部は心の中で決めて優しく頭を撫でた。

日下部

「大丈夫…。ルーミアは僕が守る…。」

消え入りそうな声でそう言った。

ルーミア

「本当…?」

日下部

「本当だよ…。」

しばらくそのままだった。しかし、

日下部

「!?!」

ルーミア

「総司…?」

日下部

「ワーム!」

彼が見た方に緑色をした怪人が現れた。数はウカワーム10体ぐら  
いか。

日下部

「ルーミアは下がって!」

彼女を後ろに下がらせ天に手を掲げる。ワームを攻撃しながらダ  
クカブトゼクターが日下部の手に収まり、

日下部

「変身…!」

【HENSIN】

マスクドフォームのまま、ウカワームに突っ込む。

Dカブト

「はぁ！せい！やぁ！」

パンチを繰り出しつつ後ろに下がらせる。

パキパキパキ！

一体のワームが脱皮し成虫体になる。それを見てゼクターホーンを右に引く。

Dカブト

「キャストオフ！」

【CAST OFF】

【CHANGE BITTLE】

マスクドフォームからライダーフォームに切り替え、クロックアップに入る。

Dカブト

「クロックアップ！」

【CLOCK UP】

電子音と共に超高速の世界に入り手持ちのカブトクナイガンでウカワームを斬りつけて爆散させる。

残りは、成虫体のワーム。姿がゴキブリに似ているのでローチワ

ムとでも言おうか。

クナイガンを連射しながら距離を詰めていく。ローチワームもそれを交わしつつDカブトの距離を詰める。

接近した所でDカブトは連続パンチを浴びせる。怯むローチワーム。ゼクターの横のボタンを押す。

【1、2、3】

Dカブト

「ライダー…キック…！」

【RIDER KICK】

タキオン粒子が全体を駆け抜け、ホーンから右足に溜まる。ローチワームに渾身の回し蹴りを放つ。

Dカブト

「やああああ！」ドカアアアアン！

ワームを倒して変身を解除してルーミアを呼ぶ。

日下部

「ルーミア！」

ルーミア

「総司ー！」

寄ってきたルーミアに今度は日下部が抱きつく。

日下部

「良かった…無事で…。」

ルーミア

「総司は強いのだー！凄いのだー！」

日下部

「ありがとう。」

「……………これから、どうしよう。」

日下部はこれからの事を考えた。前はうまくいったが流石にワームが徘徊するのに野宿をするのは不味い。

ルーミア

「どうするのか。」

日下部

「うーん…。」

ルーミア、この世界に人はいる…？」

ルーミア

「人里があるのだー。」

日下部

「じゃあ、その人里まで案内して貰えるかな？」

ルーミア

「分かったのだー。」

二人は人里に向けて歩き出す。

鍬形と黒兜。二人のライダーが会う日も近い。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d...

#### 第四話 弱さと強さ 守るもの（後書き）

どうでしたか？加賀美当て身しただけやん！って思ったらハイパークロックアップで時空の彼方へ飛ばしてください。（笑）

加賀美の説教が支離滅裂だったらごめんなさい。脳汁絞って頑張りました。

因みに、ここで加賀美が「最強になりたかった」てのは実際本編では言っていないのであしからず。

チルノの為に話を合わせたって事で。言い訳ですが（泣）

日下部くんのキャラが掴みにくいです。このままではロリコリョ）

R I D E R   K I C K

ワームはオリジナルのも考えて出します。あと、ボスは三島でも出そうかと…

地獄兄弟はもう少し待って下さい。

## 第五話 集うライダー（前書き）

長らく更新できなくてすみません。

つい最近決まった電王トリロジー。電王は好きですけど、流石にしつつこい言わざるを得ない。東映どうした（笑）KYな腐女子もどうかと。特撮ファンが見てたりするのでこの文章読んでたら節度持ってお願ひします。それとディエンドコンプフォームのダサさに東映に失望せざるを得ない、と思うこの頃です。

まあ、個人的な意見なのでイラッと来たらスルー推奨で。（笑）

それでは第五話どうぞ。

## 第五話 集うライダー

これまでの東方鍬速録は…

慧音の案内で人里まで来た加賀美は人々を襲う氷の妖精チルノと出会う。チルノの行動に疑問を持った加賀美は彼女に力のあり方を唱えた。

Dカブトこと日下部はルーミアと森をさまよっていた。そこに現れた八雲 紫は助言を残して去っていった。その後に見れたワームを日下部は撃退し、ルーミアと共に人里まで降り立った。

A . m . 9 : 0 0

加賀美

「う…ん…あれ？いつの間に寝てたんだ？」

窓から射す太陽の光に寄って加賀美は目を覚ました。

昨日、チルノと話をした後に寝てしまったようだ。

頭を掻きながら起きようと体を起こす。…が動かない。  
それもその筈、横では…

チルノ

「く…すう…」

チルノが寝ていた。しかも、抱き締められている右腕は変わったようにカチカチに凍りついていた。これで人間が冷静でいられる訳がなく、

加賀美

「うわあああああああああああああああ！?!?!?!?!?!」

結果はこれである（合掌）

慧音宅の風呂場にて…

慧音

「ったく、朝から五月蠅いと思って来てみれば何をやっているんだ！」

加賀美の右腕をお湯で流しながら文句を言う。

加賀美

「いや、まさかここまでになるなんて…。次は気をつけるよ。」

自身もお湯を流しながら答える。

一方彼の腕を凍らせた張本人はというと…

チルノ

「あは、あへあへへへへへ…」

スペシャルヘッドバッドを喰らったとさ（笑）

朝の騒動から一息、加賀美は人里を散歩していた。となりにチルノが飛んでいる。頭にはそれはそれはデカイたん瘤が…。

加賀美

「幻想卿って妖怪とかばっかりだと思ってたけど、ちゃんと人もいるんだなあ。」

チルノ

「いてて、うん。あたい達は人がいないと存在できないから。人間の恐怖の対象として存在する。それが妖怪や妖精達の本質。」

頭を押さえながらの説明になるほど、と加賀美は返事をして周りを見る。

朝からだというのに里は活気で溢れていた。市場では食材や色んなものが売っていて生活に困ることはなさそうだ。補足をひとつ言々と、道のど真ん中にいるチルノを見ても人が逃げたさないのは慧音が昨日の事件の後に手回ししてくれたらしい。

加賀美

「チルノ。そういや、幻想卿はここ以外にも土地はあるのか？」

チルノ

「あるよ。魔法の森に吸血鬼の住む紅魔館に博麗の巫女が住む博麗

神社、妖怪の山とか。」

加賀美

「吸血鬼って…ホントにいるのか？」

チルノ

「いるよ。あと、その近くの湖があたいの住んでいる所…」

加賀美？」

そこまで聞いて頷きながら考える。彼自身は幻想卿を見て回りたいと思っっているが流石に命を落とすような事はしたくない。特に紅魔館。吸血鬼が住んでいるということは少なくとも血を吸われるかもしれない。致死量かはさておき、加賀美はおとぎ話や迷信は余り信じない方だが既に現実にはあり得ないモノを見ている。これから何が起こつても不思議ではないので警戒して損はない、と体はそう言っている。

チルノ

「加賀美…？大丈夫？」

加賀美

「…？ああ、少し次の行きたいとこ考えてた。」

チルノ

「大丈夫だよ。何たってサイキョーのあたいがいるから。」

親指を立てて豪語する。

顔に出ていたのか心を読まれたようだ。しかし、彼女なりに励ましてくれたことに加賀美も自然と笑みが零れる。手を出して頭を優し

く撫でる。

チルノ

「ふえ!?!」

加賀美

「ありがとなチルノ。」

チルノ

「あ、うん……」

その間は二人の時間が流れたが呼び声が聞こえた。

住民A

「おーい!人が倒れてる!誰か来てくれー!」

加賀美

「何だつて!?!行くぞ!」

チルノ

「ちょ、ちよつと!」

声のした方向に走っていくとそこには二人の男性と少女が仰向けで倒れていた。加賀美はそこで目を疑った。あの天の道を行く男が倒れていたからだ。

加賀美

「っ!?!天道!?!しっかりしろ、天道!?!」

声を荒げて男を揺する。

男は意識があるのかゆっくり目を開けた。

???

「うつ……君は…あの時の…」

加賀美

「?何いつてんだ?俺だよ。加賀美だ。…?」

そこで彼は変化に気づいた。

自分の知っている天道は二人いた。目の前の男は一瞬だが腕だけがワームの手になったのだ。

加賀美

「お前、天道に擬態したワームか?」

???

「うん……。今は日下部 総司って…名乗ってる…。」

加賀美

「分かった。じゃあ、日下部。お前を運ぶからな。しっかり!っんしよ!捕まれ!」

チルノ!そっち頼めるか!?

チルノ

「まっかせてー!てか、あんたルーミアじゃん。なにやってんの?」

ルーミア

「えへへ…お腹…空いたのだ…(チーン)」

加賀美とチルノは二人を担ぎながら寺子屋に向かった。

P・m・13:30  
寺子屋

授業が終わり、手を振って子供達を見送る。それが彼女の日課である。

彼女は考えていた。例え半妖の体でも人間を愛している。だからこの人も外来人の彼も受け入れられたのかもしれない。

慧音

「…柄にもなく考えてしまったな。さて、戻るか…。」

加賀美

「慧音…！」

慧音

「ん？どうした…って人か？」

背中にいる日下部を見て問う。

加賀美

「ああ。とりあえず、食い物食べさせないと不味いんだ。」

慧音

「分かった。とりあえず居間に運んでくれ。」

しばらくして…

日下部

「助かったよ…ありがとう。」

ルミア

「ありがとなのだ。」

チルノ

「感謝しなさい！あたいが他人を助けるなんて滅多ないんだから！」

慧音

「調子に乗るな。それにしても…ん、加賀美？」

横で憎悪が滲んだ目で日下部を見てる加賀美に慧音は気づいた。

慧音

「その顔、仇を見る感じだな。前に何かあったのか？」

加賀美

「そういう訳じゃない。こいつの正体はネイティブ。つまりワームの亜種で俺達の敵だった奴だ。」

慧音・チルノ

「「！？」」

加賀美

「こいつは前に言った俺の親友に擬態している…。」

それに、俺は弟をワームに殺された…！」

チルノ

「加賀美…。」

拳を握り締めながら語る彼にチルノは驚愕した。自分に家族はいないものものし仲間を奪われて同じ敵がいるなら自分も同じことをするのではないかと、彼女も思った。

日下部

「……………確かに僕は憎まれる存在かもしれない…。あの時ひよりを取り戻す為なら人間なんて滅べばいい…そう考えてた…  
けど、今は違う。前にもう一人の僕にあっちの世界を託した。僕が…こっちで生きてるなら…僕の力で…この世界の…人を守りたい…  
！」

弱々しい声とは裏腹に決意に満ちた言葉であることはこの場にいる者には感じた。

するとさっきまでの鋭い目は消え、微笑む加賀美がいた。

加賀美

「そうか。悪かった。お前を試しちゃった。」

日下部

「え？」

加賀美

「心じゃ分かってたんだ。決戦の時も最期助けてくれたしさ。けど判断がつかなかったんだ。」

ルーミア

「そーなのかー…。」

加賀美

「とりあえず、その言葉に偽りは無いって判断するけどいいか？」

日下部

「うん…。これからは…ワームでも…ネイティブでもなくて…日下部 総司として生きてくよ…。」

加賀美

「分かった。信じる。」

そして、二人は互いに握手した。

慧音

「ふふふ。どうして君はそんなに潔いんだ？」

加賀美

「今じゃ過去の事だし、それに真っ直ぐ進むって決めたしな。ワームと人間だって解り会える、俺らが一番目だ。」

そんな彼を慧音は「面白い人だ」と付け加えて微笑んだ。

異形と共存する目の前の人間を見て慧音は外の、いや人間も捨てた者ではないと思った。

ルーミア

「よかったのだ〜。総司。」

日下部

「そつだね…」

加賀美

「いやあ、仲間が増えてよかった。俺一人でワームを全て倒すのは流石に骨が折れそうだから。」

日下部

「そういえば…ワームはだいぶ人里に近づいてるよ…」

加賀美

「何だつて！？ホントか!?!」

安心とは裏腹に驚く。

ルーミア

「ホントだよ。総司とここまで来たとき沢山会った。」

加賀美

「もうそこまで…!これ以上侵攻する前に止めないと!」

いきなり部屋を出ようとしますが慧音に足を掛けられてコケる。

加賀美

「ふべら!?!」

慧音

「前に突っ走るのは悪くないが落ち着け加賀美。私が見たら所今は大丈夫だ。」

加賀美

「ててて。え？それって…」

慧音

「幻想卿の住人、特に妖怪や神はそれぞれ能力がある。」

そういつて経緯を説明する慧音。

加賀美

「なるほど。つまりワームの歩いた歴史を見たから状況が分かったって事か。」

慧音

「とりあえず私が言いたいのは君達二人に協力を頼みたい。敵はどのくらいかは予想がつかないが私は人を幻想卿を守りたい。」

彼女の真激な態度を見て二人のライダーは決意する。

日下部

「僕に出来ることがあれば。」

加賀美

「安心しろ。俺達が何とかするから。」

慧音

「…二人ともありがとう。」

しかし、この時も既にワームの手は着々と迫りつつあった…。

P . m . 1 5 : 0 0

某所 山林

住民B

「今日もいいのが取れたな。」

一人の里の住民が山菜を拾っていた。  
そこに…

ザッザッザッ

???

「…」

住民B

「!?!?お前は?」

???

「俺は…お前だ…。」

ザシユッ!

この日一人の命が消え、新しい「偽りの命」が生まれた…。

???

兄貴……………大切な兄貴…

何もかも失った俺に「闇」と言う「光」をくれた…

兄貴……………何処にいるの……………？

一人にしないで……………

???

「起きなさい…」

誰だ？

四季

「起きなさい！」

???

「!?!」

ガバツと起き上がる男。

この幻想卿に役者は揃いつつある。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第五話 集うライダー（後書き）

まあ、あれっすね。

文章力低いですな。（泣）

次も頑張ります。

第六話 闇に落ちた者（前書き）

投稿遅くなりました。サーセン。m（　　）m  
今回はパンチの影山が閻魔に説教されます。

正直閻魔のセリフに自信ないです。おかしいと思ったら教えてくだ  
さい。

それでは

（ O H O ） ノ シ  
ノ、

オデノガラダハボトボドダー！

## 第六話 闇に落ちた者

ここは彼岸。死者が流れ着く最期の場であり、閻魔がその者の生前の行いにより天国か地獄に送られる。  
今まさしくそこで閻魔…の少女が一人の男を裁こうとしていた。

映姫

「全く…これから貴方を裁くというのに寝てるとは何事ですか！」

???

「……何だここ？」

男は自分の状況が分かっているらしく、周りを見ながら呟く。

映姫

「ここは彼岸です。さあ、始めますよ？貴方は…影山 瞬ですね。」

影山

「何で分かるんだ…？」

映姫

「貴方の生前の行いを見たからです。この浄玻璃の鏡は対象物にかざすことでその者の生前の行いを見ることができます。」

影山

「……………（ここが地獄か…………）」

細かく言つと地獄の一步手前だが、今の影山にはどちらも変わらなかつた。

あるのは『死』という事実だけであつた。

影山

「そうかあ……ここが地獄かあ……くくく、アハハハハハハハハハ！」

映姫

「……何がおかしいのですか？」

狂気に満ちた笑い声をあげる影山を冷静に言葉を返す映姫。

影山

「あんた閻魔だろ？だつたら早く言えよ。地獄行きだつてなあ……！  
どうせ俺なんかあ、地獄に行くんだ……アハハハハハハハハハ！」

映姫

「貴方にそれを決める権利はありません。決めるのは私です。それに、そこまでして隊長とやらになりたかつたのですか？」

影山

「その何が悪い！あの時の俺は充実していた！仲間に頼りにされて！居場所があつて！それも全て天道に奪われた！！みんなに見放されて！！殺されかけて！！」

映姫

「……………」

影山自体は天道と接点は余りない。しかし、彼からしたら天道を憎むぐらいの失意と絶望で満ちていた。閻魔もそれを理解し聞いている。

影山

「ザビーになれば、皆認めてくれる……！その為にあいつ等を利用

した！！！なのにザビーに戻っても……！何故皆は俺を認めない！！」

映姫

「単純な答えです。貴方が最低の人間だからです。

地位と名誉に拘って人は人は付いてきません。部下も守れない隊長などでは見限られても仕方のないことでしょう。ましてや自分を守っているだけの人が人の上に立つ資格もありません。あの資格者の事だつて埋め合わせでしかないのです。」

影山

「……黙れえ！！！！」

影山の激昂と共に異空間からホッパーゼクターが接近し影山の手に収まる。

映姫

「これだから人間は罪深い。少しお仕置きが必要ですね。」

溜め息を吐きながら映姫も座っていた席を立ち、臨戦体勢になる。

影山

「殺す！！変身！！！！」

【HENSIN】

【CHANGE PUNCH HOPPER】

影山が腰のベルトにゼクターを差し込むと装甲に包まれた。銅色でその姿は正にバツタ。これがパンチホッパーである。他のゼクターとは違いマスクドフォームはないが、その俊敏な動きで敵を撃破す

る。

P ホッパーは横のボタンを押し宣言。

P ホッパー

「クロックアップ!!」

【CLOCK UP】

超高速移動のクロックアップ。一瞬の内に映姫の後ろに回り込みゼクターレバーを引いて大きく跳躍。レバーを戻し拳を突きだそうとする。

【RIDER JUMP】

【RIDER PUNCH】

P ホッパー

「くたばれえ!!」

しかし、次の瞬間拳は届かず逆に吹き飛ばされた。

P ホッパー

「バカな!？」

映姫

「遊びは終わりです。」

審判『ギルティ・オワ・ノットギルティ』

勝負は一瞬だった。

閻魔の宣言により、複数のレーザーが放たれ直撃しPホッパーはそのまま地面に落下。

影山

「がはっ！」

変身も解除されそのまま影山は意識を失った。

????

「あらら。コレはちょっとやりすぎじゃないですか？四季様。」

映姫

「小町、また貴方は仕事を…」

小町

「まあ、いいじゃないですか。こいつまだ死んでるといつか生霊に近いですよ？実体がまだ残ってるし。」

映姫

「その事には感謝します。このようなイレギュラーが混ざれば仕事に差し支えますから。」

二人が談話していると影山が目を覚ます。

影山

「うっ…」

小町

「おや、気がついたみたいだね。」

影山

「…お前…誰だ？」

小町

「私は小野塚 小町さ。死神だよ。」

手に持っている大鎌を見せながら言う。影山は理解しながら自分より若く見えるこの少女らが地獄の管理をしているとは思えなかった。

実際はもっと年m（コノメニウー

映姫

「さて、もう一度貴方の罪を確認します。いいですか？」

影山

「…何でも言えよ。どうせ俺なんか…。」

映姫

「確かに貴方に降り掛かった事は普通の人より不幸です。しかし、世の中ままならない事は沢山あります。だからといって自ら下の者達を蔑ろにした罪は重いです。貴方は自分勝手な行動で部下が危険に晒されるか知っていますか？」

影山

「!?!?…それは…。」

彼にはその事に覚えがあつた。一緒に志す仲間として引つ張り、助け、時に助けられ、始めはその関係を築ける事が嬉しかった。

しかし、自分はあるの男達に翻弄され続けて…。だからザビーゼクタ

「も見限った、『働き蜂』を統率できない『親蜂』は必要ないと…。他人の説教で初めて影山は自分の愚かさに気付いた。あの時自分を追い出した隊員も矢車に続いて二度も裏切られたからあんな態度を取った。今ならそれが理解できた。」

理由が有る無いにしてもあのゼクトルーパー達はワームに支配されたくなくて、生きたくて必死に戦ってたはずだ。なのに力のある自分はそれに溺れて、無くなったと思えば努力もしないで力を手にいれようとして、そしてやさぐれて現実から目を背けて…。

影山は激しい罪悪感に襲われた。

影山

「俺は…。」

映姫

「人間失敗や過ちは何度でもあるものです。貴方には異形から人を部下を守る使命があったはずです。なら上からの命令をただ遂行するだけではなく、下の者もしっかり見ながら大局を見定め導けば良かっただけの話です。簡単にはいきませんが…。」

最後にそう付け加える。

影山

「……………」

映姫

「一応貴方の行為についてはこれまでとして、貴方に一つ言います。」

映姫が言おうとするが、

小町

「ああ四季様、それは私が説明しますよ。  
あんたさ、実はまだ死んでないみたいなんだ。」

影山

「どういうことだ…？」

小町

「ここは彼岸。勿論死人の魂が流れ着く場所なんだけど、あんた半分実体が無くて半分実体がある形でこっちに来ちゃったみたいなんだ。」

映姫

「つまり貴方はまだ死んでいないのです。どういう訳かここに紛れ込んでたのをこちらで預かったというわけです。」

影山

「……………」

映姫

「小町には後で貴方を地上に返すよう案内させます。安心してください。」

「それと説教を心に留めてこれから善行を積んでください。」

影山

「俺は…どうすればいい…」

映姫

「どうすれば…とは？」

影山

「俺は闇に落ちた身だ。善行なんてしたって受け入れてもらえない。」

映姫

「何を言い出すのかと思えば…」

「いいですか？見返りを求めた行動は止めなさい。周りは貴方の行動を見ています。それが今思った行動なら尚更周りがそれに気付き貴方とは一歩置いた関係になります。」

今の立場を変えて善人になれとは言いません。貴方は貴方なりにその答えを探しなさい。」

影山

「……………俺はまだあんたの言葉を全て聞き入れた訳じゃない。けど……………一応心の中に入れておく…／＼／」

照れた様に髪をかきむしる影山を見て微笑んだ映姫がそこにいた。この男も過ちに気付いたのだ。今まで幾多の死者を裁いてきた。中には救いようの無い悪人もいた。しかし、ここまで聞き入れた人間は影山が始めてだった。

映姫

「分かりました。私の説教を受け入れてもらえて嬉しいです。その気持ちなら貴方は死後も幸せな人生を送られるでしょう。」

影山

「まだ死んでない…。」

映姫

「そうですね。では貴方を幻想郷に送ります。行く途中で小町に説明を受けてください。」

小町、後は頼みますよ。」

小町

「はいはい。それじゃあ、この船に乗りな。」

影山

「分かった…」

（ごめん…兄貴。俺、探してくる。闇の中の光を…）

今は会いに行けない兄を思いつつ一步を踏み出した。

『答え』を見つげるために。

T o b e c o n t i n u e d . . .

## 第六話 闇に落ちた者（後書き）

スーパー説教タ〜イム！（笑）  
てな感じですよ今回は。

因みに、映姫の白黒つける程度の能力も媒体によって違ったので一種のムテキングな能力にしました。

自分で書いてて思ったのはつくづく自分は悪人みたいなライダーを更生させようとする癖があるみたいです。

矢車だす時は気を付けよう…φ（．．）

第七話 過去を振り返り…（前書き）

最近生活が不規則で益々廃人に…（笑）

それでは。

第七話 過去を振り返り…

A . m . 1 0 : 0 0

人里 寺子屋前

加賀美

「チルノオ!!!」

お前俺のベルト盗んだな!?!?!」

チルノ

「ア、アタイは知らないよ !!!」

加賀美

「嘘つけ!!!腰に付いてんだろ!!!待ちやがれ!!!ゴルアアアアアア!!!」

(。 。 。 # ) 「

凄いい形相で追いかける彼の顔には先日からの笑みの欠片も無いぐらい歪んでいる。

何故こうなっているのは言うまでもなくチルノの悪戯である。

加賀美が寝ている朝方に寝室に忍び込んで外していたベルトを取ったらしい。

住民達

「朝からウルセーぞ馬鹿野郎!!!」

ワーワーギャーギャー……!!!

日下部・ルーミア

「ズズー…。ふう。」

二人を他所にこちらの二人は居間でお茶を飲んでいる。

日下部

「いいのかな…あれ…。」

ルーミア

「多分問題ないと思うよー。」

彼は気になつたらしいが、相方が言うので飲み続けた。  
因みにこの時慧音は寺子屋で授業していた。

30分後…

チルノ

「ぢがれ、だー…もうげんがい…。」

加賀美

「ゼー…ゼー…捕まえたぞ…。」

なんとこの二人寺子屋から人里を30分間で一周していた。  
そして今寺子屋の前に戻ってきたのだ。

加賀美がチルノの手を掴み腰からベルトを引き剥がす。

加賀美

「ハア…これ盗まれたらゼエ…ワームに対抗できないだろう…」

チルノ

「あたかもハア…やってみたかったんだよハア…変身…」

加賀美

「んなもん駄目に決まってんだろ。ゼクターは資格者以外に着くのを認めない。まあ、ガタツクゼクターにボコボコにされちまうって事だ。だとしても、何か言えよ。聞いて怒るんじゃないんだからな。」

チルノ

「ウエーイ…。」

二人の痴話問答が終わった頃日下部達が外に出てきた。手にした水が入ったコップを渡す。

日下部

「はいお疲れ。水だよ。」

加賀美

「サンキュ。ング…ング…プハア！うまい！やっぱり走った後の一杯は最高だな。」

ルーミア

「はいチルノも。」

チルノ

「ありがとう。水かぁ。アタイはこうしないと…えい！」

コップの水を空間に投げると次の瞬間氷に変化した。彼女の能力の応用である。

それを一気に口に落とし噛み砕く。彼女には飴玉感覚らしい。

ポリポリバリバリ

ルミア

「コップまで食べちゃった…。」

チルノ

「アタイはこうなの。」

ルミア

「そんなんだから? (ry」

チルノ

「言わせねえよ!」

お前は何処その○が家か。

しかし談笑してる四人を他所に物影で見ているものがいた。

???

「あれはガタツク…!ライダーがここにも。作戦を練らねば。」

人影は姿を消した。

A . m . 1 1 : 3 0

寺子屋 居間

朝の騒動から戻った二人を待っていたのは、もちろん慧音の雷だった。

慧音

「お前達が騒ぐせいで授業が成り立たん！！いい加減にしろ　！！！」

加賀美・チルノ

「すみません……」

日下部

「さつき止めればよかったかな？」

ルーミア

「大丈夫だよ。それより総司遊ぼう？」

日下部

「う、うん……」

後ろ髪を引かれる思いだったが、ルーミアに引つ張られてしまった。日下部達が家を出た後に寺子屋の天井から霊弾が飛び出したのは内緒だ。

日下部 side

ルーミアに引つ張られ着いた場所は人里の門の外だった。

日下部

「ここで遊ぶの…?」

ルーミア

「うん。そつだよ。」

楽しげに答えるがその顔に儂さが見えるのを日下部は感じた。彼女の幻想郷の立場は妖怪。人里で暇を潰すのは難しいのだと感じた。

一旦思考を止めた日下部は擬態した頃の天道の記憶を呼び出した。

日下部

「ん…じゃあサッカーでも…する?」

ルーミア

「さっかー?」

日下部

「そつ、サッカー。」

すると、異空間からDカプトセクターがサッカーボールをリフティングしながら飛んできた。日下部にボールをパスすると足でリフティングし始めた。

日下部

「ふつよつほつ。」

ルーミア

「わあ…。」

それを目の前の少女は目を輝かせて見ている。

日下部は一旦ボールを置いて蹴飛ばしルーミアの前に行かせる。

日下部

「やってみる？」

ルーミア

「うん！」

渡されたボールを蹴り始めた。しかし、ボールは続けて浮かすことができない。

ルーミア

「よっんしょ…きゃっ！」

頭にぶつける。

日下部

「これにはコツがあってね…こつして…こつするといいんだ…。もう一回やってみて。」

ルーミア

「うん。」

日下部のアドバイスを受けた二回目のチャレンジ。ボールが綺麗に戻るようになった。

ルーミア

「わはー！やったよ、総司！」

日下部

「凄いよ。始めてでここまでできるなんて。」

それから数分、ルーミアはボールを蹴り続けた。日下部はそれを見ながら昔を思い出していた。ZECTの実験台にされた前から自身の記憶はなかった。思い出らしい物も無かった自分と出会ったのが、日下部ひよりだった。会って間も無く別次元に飛ばされたが、ひよりは自分を恐れず色々なことを教えてくれた。そんな彼女を日下部は大事にしたかった。彼はルーミアにひよりと面影を重ねていた。それはずっと独り身だった自分が誰かに『愛情』を求めた結果だと日下部は悟った。

日下部

「（こんなこと望むのは駄目なのかな？神様……。）」

己の人間として芽生えた感情を昔と比べて自嘲気味に笑うのであった。

慧音 side

一方慧音は一人愚痴を溢しながら人里を歩いていた。

慧音

「全くあいつらが来てから録な事がない。引き取るのを間違えたかどうか？」

前方から人が来た。

住民 A

「おっ！慧音さん！」

慧音

「おや、あの時の。山菜美味しかったです。」

住民A

「いえいえ。では、私は用事があるんで…。」

慧音

「ああ。御気を付けて。」

慧音はそれを見送る。

男の不敵な笑みを浮かべたのも知らずに…。

加賀美 side

加賀美

「ハア…半日もたってないのに疲れた…。」

慧音に絞られた後加賀美は居間で寛いでいた。チルノは外へ遊びに行ったらしい。そこへ…

慧音

「加賀美…。」

加賀美

「ん？慧音か。」

さっきの態度とは裏腹に何かシヨボ暮れた顔だった。

加賀美

「どうした？さっきの事なら…」

その答えは途中で切られた。

慧音

「加賀美…。」

色っぽい眼差しをしながら近づいてくる。

加賀美

「！？オイオイオイ！！何なんだ！？」

流石に察知したのか慌て始める加賀美。

慧音

「私を…。」

加賀美

「…お前ワームだろ？」

慧音？

「！？」

加賀美

「こい。ガタツクゼクター…。」

暗くドスの利いた声で呼ぶと、青い鋏形が乱入する。

慧音？

「ちっ！バレたか！」

感傷かれたのか急ぎ足で窓を突き破る偽物。それを加賀美は獲物を狩る獣の様な眼差しで外に出た。  
キヤー！ワー！

外はいきなり出てきた異形でパニックに陥った。  
先程の偽物はワームに姿を変え、追ってきた加賀美を見つめる。  
ワームのその姿は日下部が以前戦ったのと同じローチワームであった。

しかし、そんなことは関係ないと言うように加賀美は歩を進める。  
自分に対してとはいえ、慧音を利用して近づいてくる魂胆と彼女の面子を汚そうとした事が加賀美には許せなかった。

加賀美は怒りに身を任せた。そして、いつの日か…自身がガタツクになった日のあの少年との出来事を思い出して。

Rワーム

「貴様はここでくたばってもらおう！覚悟しろ！」

そして里内から数十匹サナギワームが沸いてきた。

加賀美

「お前達は…許さない…。」

Rワーム

「あ？」

加賀美

「人の信頼をも利用するワームを…！  
俺は絶対に許さない！！！！」

変身！！！！」

【HENSIN】

変身して直ぐ様肩のガタツクバルカンを乱射する。

複数のワームはそれに当たり爆散する。

キシヤアアアア！

距離を空けてはいけないと判断したか二、三匹接近してきた。直ぐ様格闘戦に入る。

慧音

「！？これはいつたい！？」

騒ぎを聞き付けてか慧音が戻ってきた。そこで彼女が見た光景はガタツクが闘う姿。

慧音

「加賀美！私も援護を…！」

ガタツク

「くるな！こいつ等は…オリヤあ！俺が倒す！ヴリッヤ！！」

投げる、殴る、蹴るを繰り返しながら加賀美は答える。

こちらの支援を断った目の前の男に疑問を投げ掛けた。

慧音

「何故だ！？こんな状況で！」

ガタツク

「お前に擬態した奴がいるんだ！！里の皆を騙して！慧音の面汚しをした奴を俺は許せないんだ！！」

慧音

「何だつて！？」

ガタツク

「キャストオフ！！」

【CAST OFF】

弾き出された装甲が サナギワーム達に当たり爆発した。

【CHANGE STAG BITTLE】

慧音

「……………」

慧音はその場を動けなかった。まさか、人里にもうワームが入っているとは思わなかったからだ。そして、それ以前に身近な人に接近していたことにワームの恐ろしさを知り戦慄する。

Rワーム

「クソ！まだだ！」

ガタツク

「逃がすか！クロックアップ！」

【CLOCK UP】

逃げたRワームをクロックアップで追撃。両肩からガタツクダブル

カリバーを取り出して、接近戦を仕掛ける。  
対するRワームはそれを身軽に交わしていく。が、次第に追い詰めていく。

Rワーム

「がああああ！」

ガタツク

「お前は…お前はあああああ！！！」

左右のダブルカリバーを銚に組み立てる。

【RIDER CUTTING】

そのままRワームを銚み持ち上げる。

ガタツク

「ハア！！！」

ガギイ！ギリギリ！

Rワーム

「ぐ！がああああああ！！！」

ガタツク

「うりゃあああああ！！！」

タキオン粒子がダブルカリバーに集中してRワームは爆散した。

【CLOCK OVER】

丁度クロックオーバーしてガタツクの変身が解除された。

加賀美

「慧音…」

道端で座りこんだ慧音に目をやる。

下唇を噛み締め手は握られたまま。悔しかっのだろう。同じことを経験した自分にその気持ちは理解できた。

慧音

「私は…」

加賀美

「慧音は悪くない。とりあえず、対策を立てよう。秘策もあるしな。」

慧音

「……………」

加賀美

「仕方ないな。よいしょ！」

慧音

「わ！？加賀美、何を！？」

いきなり慧音を抱き抱える。しかも、お姫様抱っこで。

加賀美

「何って…。歩けないなら担ぐまでだろ？」

慧音

「私は歩ける！だから、下ろせ！」

加賀美

「ちょ！暴れるな！たく無理するなつて。

そうやって何もかも背負ったら潰れちまうだろ。これくらいさせてくれ。」

慧音

「あ…うう…//」

ここまできたら赤面するのが相場である。そして…

加賀美

「どうした？顔が赤いぞ？」

慧音

「うるさい！」

朴念人なのも相場だ（笑）

日下部 side

加賀美達が戦っていた時、彼等はサッカーを続けていた。

ルーミア

「総司楽しいね！」

日下部

「うん。」

上達していく少女を見るのが日下部はいつの間にか楽しみになっていた。

だが、日下部は感覚に背後から来るものを感じていた。

日下部

「ルーミア……。」「

ルーミア

「うん……。分かってるよ。」「

二人が後ろを振り向くと、数匹のワームがいた。

日下部

「ルーミアは下がって。」「

ルーミア

「うん。私もやる。」「

そうか、と日下部は簡潔に了承して飛来したゼクターを取って構える。

日下部

「変身！」「

【HENSIN】

Dカブトに変身しマスクドフォームのまま突っ込む。  
ルーミアは後ろから弾幕を展開。

Dカブト

「ふっ！ハア！ヤア！」

連続パンチで一体を引かせ、隣の一体にキックを繰り出す。  
キシヤアアアアア！！

後ろから飛び掛かり、取り押さえようとするワーム。

Dカブトは冷静に判断してゼクターレバーを引く。

Dカブト

「キャストオフ！」

【CAST OFF】

吹き飛んだ装甲が当たり、取り押さえようとした一体が爆発。

【CHANGE BITTLE】

腰に付いてるカブトクナイガンをクナイモードに切り替えて、ワームに切りつける。

切り飛ばされた拍子にルーミアの弾幕が当たる。物理的ダメージは少ない方だがワーム達は怯んでいる。

ルーミア

「総司。前にでるよ。」

Dカブト

「うん。問題ない。」

ルーミア

「分かった！いくよー！」

宣言と同時にルーミアがワームの近くに行き暗闇が形成される。

ワーム達は何が起きたか分からず混乱しているらしい。  
その隙を見逃さず、Dカブトはボタンを押す。

Dカブト

「クロックアップ！」

【CLOCK UP】

【ONE TWO THREE】

Dカブト

「ライダーキック…！」

【RIDER KICK】

必殺技の宣言と同時にDカブトは高速移動で後ろに回り込む。

Dカブト

「ハアアア！」

上段回し蹴り。

【CLOCK OVER】

三匹同時にライダーキックをくらいワームは爆散した。

因みにルーミアはしゃがみこんで回避していた。

Dカブトは戦闘を終えて変身を解除した。

日下部

「ふう。」

ルーミア

「どうする〜?」

日下部

「一旦戻ろう。里でも何かあったみたいだし。それと、ルーミア。」

ルーミア

「なんなのだー?」

日下部

「さっきはありがとう。」

微笑んでルーミアの顔に手を置く。

ルーミア

「どうもなのだー。」

ルーミアも嬉しそうに日下部の手を握った。

影山 side

影山は今船に揺られている。小町に連れられて三途の川を逆流中である。

小町

「着いたよ。」

影山

「ここは、何処だ？」

そこはどこか日本の大きな館の様だった。周りには人魂の様な白いものが幾多も飛んでいる。

小町

「死霊が集まる場所、白玉楼さ。とりあえず、アンタは生霊だからここで世話になりな。一応話をつけてあるから。」

影山

「わかった…道案内ありがとう。」

小町

「ああ。つと後一つ、お前に言っとくよ。」

影山

「何だ？」

小町

「映姫様の説教をどう受け入れたかは知らないけど、実行して損はないよ。あんな身なりでも数えきれない程魂を裁いてきたからね。」

影山

「その事が。問題ない。心得ている。」

しかし、サボリのお前に言われたくない。」

小町

「うつ…それを言われちゃ立場ないねえ。まあ、解ってるならいいさ。」



T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

第七話 過去を振り返り…（後書き）

今回ダブドのライダーキックをガンバライド式にしました。  
ガタツクもカッツティングしました。

段々書いててあらぬ方向に行かないか心配です。（泣）

そして、次にはあのライダーも参加させます。楽しみにしてください！

第八話 心の温もり（前書き）

久しぶりに更新します、どうぞ。



「~~~~~っ!!」

頭を押さえながら影山がいる場所は白玉楼の門前。そして目の前にいるのが、

幽々子

「ごめんなさいね。食べ物と間違えて。」

その犯人、ここの主で亡霊、西行寺 幽々子である。

影山

「寝ぼけて人と食べ物間違えるか!!」

ドクドク

とりあえず、頭の血を拭け。

妖夢

「本当にすみませんでした!」

横では何度も土下座する妖夢だが呆れ返る影山には何の意味もない。

影山

「ハア…とりあえず、アンタ達に話があるんだよ。死神の方から話は聞いてるな?」

幽々子

「はいはい。聞いてるわよ。貴方妖夢と同じ体何ですって?」

妖夢

「え、そうなんですか？」

影山

「ああ、そうらしい。」

彼自身霊体になった実感は余りないようだ。

幽々子

「彼はこれからここで預かる。それが閻魔様の命令みたいね。」

妖夢

「そうでしたか、分かりました。

私は白玉楼の庭師兼剣士の魂魄 妖夢と申します。よろしくお願ひ  
します。」

幽々子

「私は西行寺 幽々子よ。」

幽々子はともかく妖夢は綺麗な御辞儀をした。

影山

「俺は…影山 瞬。

…よろしく頼む。」

挨拶を言いつつも影山は目を反らした。

幽々子

「ふふふ。まあ、挨拶はこれぐらいにして…これから貴方もこの  
家族よ。住むからには存分働いて貰うわ。」

そして、その仕事が…

影山

「まさか、幻想郷に来てるなんてな…。」

ワーム退治である。

数匹のワームが影山を取り囲んでいた。幽々子曰く、数日前から百体ぐらい出沒してたみたいで、めんどくさくなったらしい。すでに五十体程度は幽々子の「死を操る程度の能力」で殺したの事。

影山

「（ライダーシステムより強い能力とは…理想郷とは呼び難いなここは…。）」

ライダーシステムを使わないでワームを殺したのを聞いて影山は幽々子を敵に回さないと心の中に止めといた。

場面を戻して、ワームは全部サナギであった。殲滅するには大した事はないが数で押される可能性があった。

影山

「ハア…。面倒だ…。」

（…しかしながら、策はあるか…よし。）

意を決した影山はホッパーゼクターを呼び出し手に納めバツクルを開く。

影山

「変身！」

【HENSIN】

【CHANGE PUNCH HOPPER】

変身した後、Pホッパーはワームに背を向けた。

案の定ワームはそれを追ってくる。

Pホッパー

「（よし。うまくいった…。）」

そのまま白玉楼の倉の隙間に逃げる。

ワーム達も一体ずつ侵入する。

ここで影山はゼクターレバーを引く。

【RIDER JUMP】

壁に向かって足をついて飛び、ワームに突進。続いてレバーを戻す。

【RIDER PUNCH】

Pホッパー

「うらあああああ！！」

腕のアンカージャッキーを可動させてワームを田楽刺しの要領で殴る。

タキオン粒子が後ろのワームに貫通して爆発した。

ワームがないのを確認して変身を解除した。

このやり方はかつてザビーのライダーステイングの時に使ったものであった。

そして、ホッパーのジャンプ力とアンカージャッキーのパンチの威力を上げる特性を活かしたのだ。

影山

「経験が生きた、か…。ハア…。」

ため息を漏らすと影山はそのまま白玉楼に戻っていった。

P.m. 14:00

白玉楼 居間

影山が戻ると居間では幽々子達がお茶を飲んでた。さらに幽々子は美味しそうに饅頭を頬張っていた。

幽々子

「こにようんひゅうふあいあにえ（この饅頭美味いわねえ）。

ありゃ、もひよっへひひゃのへ。ほふはへはは（あら、戻ってきたのね。お疲れ様）。」

影山に気付いた幽々子は手を振った。

影山

「先ずは口の物呑み込んでから喋れ。理解出来ない。」

言われた彼女は少し膨れて饅頭を呑み込む。

幽々子

「もう。細かい事言つと禿げるわよ？（へ）（）」

影山

「禿げるか！…全く。」

呆れて腰を下ろす。

妖夢

「あの、その服…。」

妖夢が影山の衣服を指差した。所々破けていて鎖が疎らに付いていた。

影山

「ん…ああ、これは俺が地獄に落ちた時から着ている。」

そこまで語ると少し声のトーンを落として話を紡いだ。

影山

「俺は昔これ以上ない地獄を味わった…。とは言っても思い返すと自業自得もいとこだ。そんでもって暗闇の生活に身を落とした時に兄貴がくれたものだった。…と俺としたことが柄にもなく喋っちまった。」

話を変えようと影山は考えた。しかし、幽々子が質問する。

幽々子

「貴方、今は楽しい？」

影山

「？ああ、まだあの時の考えは全ては捨てきれてない。だけど、自分のした過ちは…気付いたかな。」

幽々子

「そう。分かったわ。聞きたかったのはそれだけだから。ありがとう。」

影山

「？」

幽々子はそのまま部屋を出ていった。残されたのは質問の意味を考えている影山と険しい顔の妖夢だった。

影山

「…なんなんだ一体？」

妖夢

「少なくとも今はお話できません。いずれ分かります。」

妖夢も部屋を出る。

意味深な言葉に影山は更に頭を悩ませるのだった。

妖夢 Side

妖夢

「（本当に大丈夫かな？幽々子様…。だけど…これが紫様の計算の内なら…。）」

妖夢は廊下を歩きながら一人先日の事を考えていた。

影山が来る数日前…

この日白玉楼は静かだった。

突然現れたスキマ妖怪によって…。

紫

「今日は貴方に話をしに来たの。幽々子。」

居間の席で紫と幽々子と妖夢が並ぶ。

幽々子

「今日は何かしら？また面白い話〜？」  
紫の目が真剣そのものになる。

紫

「貴方の生前、過去の話よ。幽々子。」

妖夢

「！？紫様！それは…！」

紫

「余計な口出しは無用よ。今から言うことは全て事実よ。」  
余裕綽々に語るが、オーラは空気を張りつめる程だった。

紫

「（ごめんなさい幽々子…。でも、友人として知ってもらいたい。自分の過去を。それにこんなチャンス二度とないかもしれないから…。）」  
そして紫は語り始めた。亡霊になる以前の「友人の人生」、死を操る力を得た独りきりの女性の話…。

P . m . 19 : : 00

幽々子 s i d e

いけない。

人に感情を押し付けてしまう所だった。ただ、何故だろう。

私は今涙が止まらない。

それは何故？

あの子が羨ましいから？

あの子が恨めしいから？

あの子が私と同じだから？

いや違う。

私は救われたいのかもしれない。

自分の過去を知ってしまったから。

何故こんな感情が生まれたかは分からない。

今まで悲しい何て無かったのに。

幽霊姫は今宵亡霊になり始めて泣いた。

影山 side

影山の頭から湯気が出始めていた。

さっきの事は自分のせいかもしれないと思い、頭を悩ませる。その点では成長したと言えるのだろう。

影山

「文章成長してないお前が言うな作者。」

メメタアな発言は控えてね。影山。

影山

「非常識な奴等ばかりだ。」

常識は投げ棄てるもの（キリッ

影山

「さて、作者は無視して…幽々子の所に行くかな…」  
ゆっくり立ち上がり幽々子の部屋に向かう。

影山

「幽々子。いるか？」

返事がない。

影山

「まあ、聞けるなら聞いてくれ俺h…」

バンッ！

押し倒される。

影山

「うわっ！」

幽々子

「何よ。貴方に質問したのは私。悪く思つのは検討違いではなくて？」

影山

「まあ、それはそうだが…じゃなくて、何故押し倒す。」

幽々子

「貴方がイケメンだ・か・ら？」

影山

「ハア…。…誤魔化すな。泣いてたんだろ？」

幽々子

「……………」

俯く彼女は何処か物寂しい目をした。

影山

「とりあえず、二度目だが俺は地獄に落ちた者だ。人に言われるまで気づかないバカだ。

だから、お前がどんな過去を持っているか何てのも分からない。その口で話さない限りは…。」

幽々子

「……………」

いつもおちやらけているのに…この人の過去は想像もつかない事があつたのかな…。

小さなプライドにしがみついていた過去の自分よりも辛い立場に会つたに違いない。部下達にも親身に接してやりたかった…。影山はそう思った。

影山

「今すぐ話せなんて言わない…いつでも待ってる。」

それに…。」

押し倒された状態から幽々子を抱き寄せる。

幽々子

「キャツ…!？」

影山

「これくらいは出来るよ。」

……独りで抱え込むな。会って間もないけど、話を聞くぐらいどう  
って事ない。あの庭師も心配してた。だから、笑って安心させる様  
に…な？」

幽々子

「……………ズルいわ。」

影山

「…ん？」

幽々子

「だって…そんなこと言ったら…泣いちゃうし…」

影山

「泣くなら泣いていい。」

幽々子

「グスン…ふえ…エエエエエエ…!！」

妖夢

「（紫様はこの為に…?)」

でも、良かった。ありがとう。影山 瞬。」

この日、博麗の巫女もビックリ(?)の異変、「幽霊姫の二度泣き」が文々。新聞に載ったのは次の日になる。

??? Side

暗闇の中で何かが蠢いていた。

緑のサナギワーム…

そして、黄色の閃光…

パワードスーツの様な外見はマスクドライダーシステムと同じだが、ベルトの形は違う。そして特徴的なのは携帯電話が差し込まれていた。

仮面のXに複眼。まるで全てを睨む様である。

そのライダーは手に持つエネルギーブレードを持ってワーム達に切りかかる。

ガキイイイイイン!!

ザシュツ!!

次々と切り裂かれ爆散する。

勝てないと分かり逃げ出す残りのワーム。

しかし、ライダーはそれを逃がすまいと腕の腕時計のX字の表面を

外し、携帯電話につける。

【COMPLETE】

胸の装甲板は排除され中のユニットが露になる。そして黄色く発光してたラインも銀色に変わる。  
ライダーが腕時計を押す。

【START UP】

次の瞬間、地面が陥没していく。

ドカドガガガガガガガガガガ!!!

ワーム's

「!?!」

ワーム達が気付いた時にはマーカーに捉えられる光景。  
そして爆散していく。

????

「邪魔なんだよ…俺の思い通りにならないものは全て…!!」

緑の炎に佇むは  の戦士のみであった。

To be continued…

## 第八話 心の温もり（後書き）

みなさん。お久しぶりです。中々継続しづらい難儀な頭になってますです。はい。

影山

「吹っ飛んだ頭だなオイ」

よ、影山君今日は主人公お疲れ。

影山

「ああ、アンタのせいで大変だった。」

なぐに言ってるの。フラグ作っただけありがたいと思へ。

影山

「…あれは別にそんな意味じゃない。女を慰める為の…」

世間じゃそれで上手く行く奴等いるんだぞーこのこのリア充。

影山

「…しばく。ライダーパンチ!!!」

ちよっ生身dギヤアアアア!

言い訳ベント…原作じゃ幽々子は死んだ前の事は知らないまま過

してませんが、今回は辻褃合わせでこんな風にしました。

まあ、幽々子が何時でも笑っているなんてことは無く、誰でも泣きたくなる時はあるってな考えです。

因みに、幽々子の過去については次に語るか分かりませんが、自分で探すなりしてください。

最近一話ずつでの急な展開とシリアスがあるのもすみません。

Mugenのwikiに書いてあると思うのでそちらで確認するのがいいと思います。

そして、とある人の意見により伏線であるライダーを出しました。伝説のあのフォームも！！

文章がずっとメチャクチャかもしれやせん。

だが、私は謝らん！

— O M O ) < チョチョウ！

すみません。治します(泣)

では、次回もお楽しみに！

## PV2万突破記念というハツタリ(前書き)

タイトル通りです。今回は補足紛い兼影山リア充発揮します。どうぞ。

## PV2万突破記念というハッター

P.m. 12:00

白玉楼 食卓

影山

「兄貴…俺…もう駄目…」

影山が倒れて咳く先には机に所せましに並べられた料理。そして皿の上のものは一点に吸い込まれて消えていく。

知ってる人はお分かりの通り、張本人は幽々子である。

彼女の胃袋はそれこそ幻想郷の全てを喰らい尽くすと比喻される。要はリミッター解除したギャル○○である。

何故こうなったと言うと…

一時間前…

幽々子

「ねえ、瞬。貴方料理は出来る？」

影山

「料理？出来るよ。それが？」

幽々子

「お腹すいたの。それと、貴方も食・べ・た・い・わ。」

影山

「今さらっと爆弾発言しただろ。」

このままではこの小説が15どころか18禁になってしまう。いいぞもつとや」

妖夢

「斬ッ！」

ひでぶ!!

影山

「じゃあ和食でも適当に。」

幽々子

「やった〜。( )」

影山

「妖夢、材料はあるか？」

妖夢

「一応あります…。」

妖夢のテンションが低いのに気付いた影山。

影山

「どうした？」

妖夢

「いえ、実は…」

一時間後…

幽々子

「私幸せ〜！（モグモグ）」

この有り様である。因みに、かれこれ六十品は作っている。それでも一向に止まる気配は無く次々と料理が消えていく。ダイオンも驚きの吸引力である。

妖夢

「影山さ〜ん。大丈夫ですか？」

動かない、ただの屍のようだ。

妖夢

「じゃあ、私も食べ〜…」

影山・幽々子・作者

「『『ただし、妖夢！！！』

テーマはダメだ！！』

貴方はダメよ！』』」

.....

妖夢

「新手のいじめ？なにそれ怖い。」

P.m. 13:00

脱衣場



「驚くわ！てか胸隠せ！」

顔を隠しながら布を投げつける。顔はのぼせる前から真っ赤である。

幽々子

「むう、分かったわよ。…よいしょ。はい、いいわ。」

手をどけるとお湯に濡れた艶やかな幽々子の姿があった。思わず見とれる。

幽々子

「何？私に惚れた？」

影山

「ち、違う！ふ、風呂に入るぞ！」

幽々子

「うふふ。はいはい。」

風呂に入る二人。

影山

「…なぜ密着する。」

幽々子

「いいじゃない。これくらい。」

そして更に密着。影山の右腕はスイカップに掌握されてしまった。更にうなじにスタイルの良さのダブルパンチ。

これで普通の男が冷静でいられるはずは無く…

影山

「んんんんんんんん！！うおおおおおおおおお！！！！」

ぶうううううううううううううう！！

致死量の鼻血バースト。

幽々子

「きゃあああああ！瞬、しっかり！」

妖夢

「何かありましたか！？って何やってるんですか！！」

ギャーギャーポーピー

そんなこんなで過ぎていく白玉楼の日常である。

Side ????

その空間は目が浮かび、様々な標識、手などが蠢いていた。  
そこに一人の男とスキマ妖怪がいた。

???

「あいつらは元気か？」

紫

「ええ、元気よ。貴方達のお陰で友人を救えたことには素直に感謝するわ。」

『世界』の方は大丈夫かしら？」

????

「『スーパージョッカー』と『デイケイド』による融合が加速している。今はリ・イマジネーション達が食い止めてるが時間の問題だろう。」

紫

「そう。最近結界が良く歪むから大変。何とかして頂戴な。」

????

「分かっている。その為に加賀美達を預けているんだろう。」

紫

「そうね。因みに、レミリアからの伝言。『諦めなければいい方向に進める』って。」

????

「そうか。」

おばあちゃんが言っていた。

『信じることを諦めた奴に勝機はない』とな。

時間がない。行ってくる。それと、二人の妹も頼む。」

紫

「分かったわ。頑張ってるね『天道総司』。」

二人がスキマに消えていった。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
...



(笑)あり(涙)ありの東方鋤速録！  
それじゃ、またねー！」

## 第九話 加速する世界（前書き）

最近ニコ動のオンドウル動画がおもろすぎて腹筋崩壊しました。  
笑）

今回は前回言ってた奴だします。

どしどし。

## 第九話 加速する世界

A . m . 8 : 0 0

寺子屋 寝室

加賀美

「ん…かああああ…よく寝たな…」

加賀美は陽気な日差しで目を覚ました。

その後、里には瞬く間に怪物の噂は広まった。動けない慧音に変わって加賀美はすぐに里の人達に事情を説明し見張りを強化すると厳戒体制を敷くように指示を出した。

慧音を連れて寺子屋に戻った加賀美はそのまま彼女を置いて合流した日下部とクロックアップを使って里の警備をした。幸いワームはあれだけだったが未だに油断は出来なかった。そして一夜越して今に至る。

隣にはチルノが寝ていた。昨日もワームの搜索に尽力してくれた。そっと寝かして置こうと加賀美は思った。

慧音

「おはよう。加賀美。」

ふすまを開けて顔を出す。

加賀美

「おはよう。もう大丈夫なのか？」

慧音

「…ああ、大丈夫だ。それより秘策はあるのか？」

言われて加賀美は置いてあるスーツの裏ポケットから試験管を取り出しながら言う。

加賀美

「無かったら言わないよ。」

さて、日下部達起こしにいつか！」

慧音

「ふふ。そうだな。」

日下部 side

日下部

「ん…ふああああ…。」

丁度その頃日下部も目を覚ました。

布団から起き上がると隣にはルーミアが寝ていた。社会的に犯罪レベル兼ロリコン認定だが幻想郷故致し方なし。（加賀美も同じだが。）

もともと年齢的に妖怪のルーミアの方が歳上なのは本人は気づいていない。

ルーミア

「スウ…スウ…。」

可愛く寝息を立てている彼女をゆるする。

日下部

「起きて、ルーミア。」

だが、次の瞬間日下部は凍りつく。

ルーミア

「黒き…太陽…の…神…貴方は…全て…を…滅ぼす…」

日下部

「!？」

その言葉を全てでは理解できなかったが、カブトが太陽の神と呼ばれている事から黒き太陽の神が自分を指しているのが分かった。

日下部

「僕が滅ぼす…全てを…？」

自らの力に恐怖する日下部であった。

A . m . 10 : 00

集会場

この日、里の集会場に人達が集まった。理由はワームの洗い出し。台の上に乗った加賀美が言う。

加賀美

「みんな聞いてくれ。今日はこないだの怪物を探す為に集まってもらった。説明したと思うけどあいつらは人に擬態して近づいてくる。」

見た目では判別しにくい。」

住民D

「じゃあ、擬態された奴はどうなるんだ？」

住民の質問に答えを詰まらす。

加賀美

「余りスラツと言えないけど…既に殺されてる…」

それを聞いた後に涙を流す人達がいた。恐らく擬態された人の身内なのだろう。

ギリギリ

悔しさの余りに拳を握りしめ、加賀美は話を続ける。

加賀美

「で、この試験管に入ってる者を皆に嗅いで貰う。」

取り出すのは朝方慧音に見せた薬品。アンチミミック弾の原液。以前の戦いでワームの判別をするときに使った。

慧音

「彼曰く、人間にも吐き気を促すらしい。しかし、今の状況を打開する策がない。だから皆には少しの間我慢してほしい。」

そして、試験管のコルクを外そうとしたとき…

日下部

「待つて…。」

加賀美達が振り返るとそこには日下部達が出た。

慧音

「日下部…!？」

チルノ

「ルーミア、アンタなにしてんのさ。」

二人の問いに答える。

日下部

「話をしたい。あの人達と…。」

視線は住民達を見ていた。

加賀美

「まさか…!？」

日下部

「うん…話すよ。僕の正体を…。」

加賀美

「ダメだ!そんなことしたらお前は…!」

日下部

「いいんだ。これは僕の覚悟だ…。それに…こんないい人達を騙すのは悪いから…。」

そして日下部は台に上がる。

日下部

「突然すみませんが僕の正体について話します。」

住民

「ざわ…ざわ…」

日下部

「僕はあの怪物と同じ…怪物なんです。」

そう言うと一瞬だけネイティブの姿に変化した。

それを見た住民達は驚きを隠せない。何しろ自分達の身近に脅威となる怪物がいたからだ。

どよめき始める群衆に日下部は言葉を続ける。

日下部

「僕は人を襲う気もないし殺す気もない。すぐには信じて貰えないかもしれない…。けど僕を受け入れてくれた人達を騙し続けるのが嫌だった。迫害するなら好きにしてくれていい。」

一瞬の静寂。それを破ったのは一人の老人だった。

住民G

「そんなことする訳ないじゃろう。総ちゃんは総ちゃんじゃ。それ以上も以下もないよ。良く正直に言ったね。」

日下部

「おじいちゃん…。」

それを皮切りに皆も同じ意見を上げた。

日下部

「みんな…」

隣で成り行きを見守っていたルーミアが日下部の服の袖を引っ張る。

日下部

「何、ルーミア？」

ルーミア

「良かったね。総司！」

日下部

「うん！」

その無垢な笑顔に普段見ることはない飛びきりの笑顔を向けるのだ。  
った。

一方加賀美達はハラハラとしていたが、結果を見て胸を撫で下ろした。

加賀美

「ここが外だったら違う結果になったかもな。」

慧音

「けど分かり合えた。それでよかったじゃないか。」

チルノ

「まあ幻想郷だしねー。何だっけ？幻想郷はなんちゃら…」

加賀美

「全てを受け入れる… だろ？」

チルノ

「うん！ それそれ！」

人の心の暖かさがそこにあつた。

だからこそワームを倒す為にひたすら走ろうと彼はこの日、決意した。

その後一人ずつ里の人達を検査したがワームは一匹もいなかった。

その状況がいいとは思える事はないので加賀美達は次の手を打つために慧音の勧めで吸血鬼の館、紅魔館に行くことになった。

P・m・ 13:00

里 出口前

慧音は加賀美達を見送る。

加賀美

「それじゃ、行ってくる。」

慧音

「ああ、気を付けてな。」

日下部

「里の方は大丈夫ですか？」

慧音



慧音

「君、大丈夫か？」

「??？」

「痛てて。…何とか。」

慧音

「名前は？」

「??？」

「達也…華菱 達也です。」

胸のダイヤのアクセサリーがちらつく。

P . m . 1 3 : 3 0

街道

加賀美

「ずいぶんと離れたな。チルノ。後どのくらいだ？」

チルノ

「もうちょいだよ。湖見つけたらもう少しだから。」

元気よく歩いている二人だが後二人は…

日下部

「ふう…」

ルーミア

「総司大丈夫？」

日下部

「大丈夫だよ…。」

普段長く歩いていない日下部からしたらこの道は地獄である。  
ルーミアはペースを合わせて歩いている。

加賀美

「日下部が不味いなありゃ。」

後ろを確認しようとした。次の瞬間、

バババババババ

キンキンキンキンキンキン！

銃声と弾く金属音。

銃弾はガタツクゼクターが全て弾き返した。

そして前方には顔の が特徴のライダーがいた。

二人はゼクターを構える。

加賀美

「何だお前。人をいきなり撃って…。それにゼクトのライダーじゃないな？」

その答えに答える事なくライダーは話を続ける。

カイザ

「お前達のベルトを貰う…！」

日下部

「君には渡さない…！」

本能的に危険を察したか口から言葉が出た。そして戦いの火蓋が切  
つて落とされた。

加賀美・日下部

「変身！」

【HENSIN】

二人のライダーはマスクドフォームのまま突っ込む。

Dカブト

「二人は下がって！」

ルーミア

「分かった！」

チルノとルーミアは物陰に隠れた。

対するカイザはブレードの付いた武器カイザブレイガンを逆手に持  
つてマスクドフォームの装甲と切り結ぶ。

Dカブトはカブトクナイガンをアックスモードに切り替えブレード  
をいなくす。

ガタツク

「ハア！」

そして間の空いた所にバルカンを撃つ。この短期間で二人のコンビネーションは進化していた。

爆煙で見えなくなった所にガタツクが追撃する。

カイザ

「チッ」

カイザも負けじとブレイガンをガンモードに切り替えて弾を撃ち落とす。

しかし、一発見逃してしまいボディに直撃する。

カイザ

「ガハッ！」

爆煙が晴れる。目の前のライダーに疑問をぶつける。

ガタツク

「そのライダーシステムは何だ！お前の目的は何だ！？」

カイザ

「くっくっく…」

しかし、またも質問には答えずカイザは笑う。

加賀美

「何が可笑的い？」

カイザ

「そういうのは敵が倒れてから言うんじゃないかなあ？！」

カイザは腕時計からメモリを外しベルトに装着する。

【complete】

カイザの胸の装甲が粉碎し、体色が変わった。

ガタツク

「何だ!？」

【START UP】

カイザの姿が消えた。地面が次々と陥没してガタツクは高速で殴られる。

ガタツク

「ガハッ!クロックアップか!??グッ!」

Dカブト

「キャストオフ!」

【CAST OFF】

【CHANGE BITTLE】

アーマーが四散するが相手は高速移動で交わす。

Dカブト

「クロックアップ!」

【CLOCK UP】

高速の世界に入りカイザを捉える。直ぐにクナイガンでクナイモ

ドにして切り結ぶ。

しかし、パワーアップしてるのか攻撃が全て押されていく。  
カイザ

「君の力はこの程度……って事でいいのかなあ！」

Dカブト

「クッ！」

クナイガンを弾かれ胴にその刃が迫った。

だが、その刃は二つのショーテルに止められた。

ガタツク

「大丈夫か？ 日下部。オリヤ！」

そのままブレイガンを押し弾く。

Dカブト

「ありがとう。」

二人は見合ってゼクタースイッチを押す。

One two three

ガタツク・Dカブト

「「ライダーキック！」」

【RIDER KICK】

そのまま高くジャンプする。対するカイザも足にポインターを付けてベルトの携帯電話を回しボタンを押す。

【EXCEED CHARGE】

黄色い閃光がカイザの体を伝ってポインターにチャージされる。跳躍し二人の前方にマーカ―を射出し両足を揃えてキックの体制を取る。

カイザ

「でいいいやあああああああ！！！」

ガタツク・Dカブト

「ハア！！！」

光が当たりを包んだ。

.....  
噴煙が晴れると加賀美と日下部が倒れていた。

加賀美

「いつつつ...日下部、いるよな？」

日下部

「いるよ...あのライダーは？」

加賀美

「消えた。どこいったか分かんね...。」

日下部

「そう……。……。やばかったね……。」

未知のライダーシステムは自分達のライダーシステムと比べても十分脅威であった。

ツールによる戦局対応。

身のこなしも敵としては充分強いレベルだった。

加賀美

「ってここで話し合ってもしやあねえな。チルノ達、出てこい！」

勢い良く起き上がって森の陰で隠れてた二人を呼ぶ。

チルノ

「酷くやられたね。ま、サイキョーのあたいには敵じゃないけど。」

ルーミア

「真っ先に逃げたよね？」

実はあの時……

Dカブト

『二人は下がって！』

ルーミア

『分かった！』

そう言って隠れようとしたとき草陰に隠れていた。

駆け寄り一言。

ルーミア

『ビビってたのっ。』

チルノ

『べ、別にビビってたね〜し!〜』

回想終わり〜

加賀美

「……………」

日下部

「あはは……………」

呆れて頭を押さえる。

ルーミア

「そろそろ行こー。もう少しだし。」

加賀美

「だな。よし!行くぞ。」

一行は紅魔館を目指す。

S i d e カイザ

森の一角。そこでカイザはいた。  
疲労困憊してるのか。肩で息をしていた。

変身を解くため携帯電話カイザフォンをベルトから抜いた。木にもたれ掛かると少し離れた所に銀の幕が出現する。そこには帽子を被り茶色のコートを着た人物がいた。

???

「どうだね？ブレイクフォームの調子は。」

目の前の男、「草加 雅人」に問いかける。

草加

「誰に向かって口を聞いているのかなあ…?」

反論するが体が疲れていることを知り男は笑う。

???

「ふっふっふ…まあいい。精々頑張るのだな。」

男は去ろうとしたが、呼び止められる。

草加

「鳴滝。あの約束は叶うんだろうね?」

鳴滝

「ああ。君がああのライダー達のベルトを持ってくるのなら叶えよう。」

」  
そして潜った銀幕に消えていった。

草加

「真理…。」

ただ一人自分が愛した女性を思い出し眩く。

T o b e c o n t i n u e d …

## 第九話 加速する世界（後書き）

今回出したオリジナルキャラ。実は…

出そう

なりたいライダー妄想

ダディーナザン

自分+ダディ

出来た

ライダーファンの皆さん。

これは私の責任だ。だが私は（ザヨゴ）

だが、ダディはギャレンはカッコイイ、異論は認めない。

まあ、ライダー見てるとできるわけ無くても変身願望あるわけで。  
そこ！厨房とか言うなよ！

あと、日下部の性格について。あまり安定しないんで言っちゃ…

天道に良太郎インストール、です。

そんなわけでノシ

## 第十話 紅き城、ダイヤの旋律（前書き）

皆さんお久しぶりです。

今回は紅魔館と自分の分身もとい花菱くんにスポットを置きます。

え？加賀美出せ？主人公が出てない？

.....

世の中には主人公（笑）というものがあってだな…

まあ、自分の気まぐれなんで呆れたらそこで終わりってことで。

それではどうぞ。

## 第十話 紅き城、ダイヤの旋律

????

「そろそろね…。」

自身の体よりも大きい椅子にすわりながらそう呟くのは紅魔館の主レミリア・スカーレット。生粋の吸血鬼で「運命を操る程度の能力」の持ち主である。

彼女の能力は一見聞けばチート能力の様に思われがちだが、彼女自身人の運命をねじ曲げたりする事はあまり無く、彼女と会うことで数奇の運命にあったり、それをただ教えたりするだけである。

そのレミリアの隣の空間が歪むと一人のメイドが現れる。

彼女は十六夜 咲夜。紅魔館のメイド長であり、「時を操る程度の能力」の持ち主。

分からない人は「ザ・ワールド！」か「タイムストップ」の解釈でよろしい。

余談だが、知ってても AD長などと言ってはいけない。ナイフが上から来るぞ！気を付ける！

咲夜

「レミリア御嬢様。客人がお見えになりました。」

レミリア

「それじゃあ客間まで案内しなさい。あと、フランにも伝えて頂戴。遊び相手ができたってね。」

咲夜

「畏まりました。」

そう言うと咲夜は姿を消した。

レミリア

「さて、加賀美 新に日下部 総司…。ここにはいないライダー達…面白くなってきたわ、ふふふ。」

一人笑う吸血鬼の声だけが館に響いた。

Side 加賀美達

P.m. 14:15

紅魔館 入り口

チルノ

「着いた！ここだよ！」

加賀美

「ここはまた随分でかい屋敷だな。」

見上げた屋敷の大きさは神代 剣の屋敷を彷彿させた。辺りを見回すと広大な屋敷な割に植物が溢れ綺麗に整頓されていた。

ルミア

「すごいなー総司。」

日下部

「うん。…?」

見ていた日下部は気付いた。正面の門の前に一人寝息を立てている人物がいた。

???

「ぐーすぴー…」

日下部

「あれ大丈夫かな?」

チルノ

「いいのいいの。アイツ中国って呼ばれてていっつも寝てるから。」

加賀美

「中国か…」

確かに言われてみれば中国っぽい格好をしていた。頭の帽子の籠の字が更にそれっぽさを増させていた。

しかし、加賀美にはもうひとつ気になる事があった。

加賀美

「門の前において門番…ってアイツの仕事なのか?」

チルノ

「みただよ。たまにナイフ刺さってるみたい。」

それを聞いた加賀美の頭にカチンと何かが響いた。

加賀美

「ほお…仕事をサボるとはいい度胸じゃねえか。」

ボキボキ

日下部

「え、ちよつと…。」

日下部の制止も聞かずに加賀美は門番に向かって歩き出した。実は加賀美もゼクトの下積み時代にあのような見張りや門番はしていたのだ。その性質上寝ることは許されない事だが目の前でそれをされたのは真面目人間の加賀美には許せなかったのだ。

門番に近づき耳元で思いきり息を吸う。

加賀美

「寝てんじゃねえ!! ゴルアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!!」

???

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア!?!!!」

鳥達が羽ばたく怒声が響いた。

.....

???

「もう酷いじゃないですか！もうちょっと優しく起こしてですね…」

加賀美

「うるせー！仕事すんなら寝んな！」

ワーワーギャーギャー

二人が口論になり三人は置いてかれる。

日下部

「どうしようか…。」

チルノ

「じゃあ、呼ぼうか。」

そう言うとチルノは中国の横に回り込み腰に付いた鈴を鳴らす。

????

「そ、それは鳴らしたら…！」

止めようとしたが時既に遅し。空間が歪んだ先に咲夜が現れる。飛びきりの笑顔で（笑）

咲夜

「鳴らしたら…何ですって？」

????

「ひい！？咲夜さん！？」

咲夜

「また仕事サボったのね？美鈴。」

美鈴

「え、いや…その…。」

咲夜

「貴方が何秒動こうとも関係ない処刑方法を（ry）」

世界の時間が止まる。

そして美鈴が次に視界に移ったのは…  
たくさんナイフ。

美鈴

「いやあああああああああああああああああ！！！！！！」

美鈴が刺された後四人は咲夜に案内されて紅魔館に入った。そして今は応接室にいた。

日下部

「クロックアップしたみたいに紅茶が出てきたね…。」

目の前の紅茶を見ながらそう呟く。  
彼女の能力の片鱗を見て初め二人は驚いた。少し時間が立つだけで咲夜が目の前に現れて持つてくるのだから。

加賀美

「いや、多分あれは時を止めたんだ。」

日下部

「え？分かるの？」

加賀美

「以前のワームでそんな奴がいた。似た感覚だったんだ。」

加賀美はカッスワーム戦った時を思い出して言った。

日下部

「すごい所だね。幻想郷は。」

加賀美

「だなあ。人間からしたら魅力的だしな。」

Side 慧音

P.m. 13:00

人里 寺子屋

二人は居間で情報交換をしていた。

慧音

「つまり君は何の前触れもなくここに来たということだな？」  
達也

「そうですね。いきなりスキマみたいなのが現れて……」

そう答えるのは花菱 達也。彼は加賀美達とは違う世界の住人で仮面ライダーは職業として機能していた。不死生物アンデットを特殊なトランプカード、ラウズカードに封印するのが主な仕事らしい。彼はダイヤのカードを集めていたらしく、その途中でここに来たと言う。

彼曰く、共存しているアンデットもいて犯罪などを犯すアンデットを封印するのが仕事でもあるらしい。

慧音

「なるほど。経緯は分かった。君はこれからどうする？」

花菱

「うーん…戻る方法を探しながらここで旅したいんですが…。」

少し悩みながら花菱は答える。

慧音

「そうか。旅するのは自由だが、幻想郷を荒らす事はしないでくれ。所で…」

慧音が視線を変えた先には部屋の壁に横たわる大きい黒いセミハイドケースがあった。

質問を察したのか花菱は言い切る前に答えた。

花菱

「ああ。あれは俺の大事な相棒ですよ。トロンボーンって楽器です。」

そして徐にケースを取って開けた。そこには金銀の色彩が美しいト

ロンボーンがあつた。

慧音

「君は音楽が好きなのか？」

花菱

「はい。腕は決して上手くないけど俺とこいつの音を人に聞いて貰つて少しでも皆に笑つて欲しいから。」

花菱は嬉しそうに答えた。

花菱

「この世界は自分の世界と似てますね。異形と人間が手を取り合つてる。まだ自分の世界は不完全だからここまでとは行かないけど……」

少し自重気味に話す花菱に慧音が言葉を返した。

慧音

「不完全な事は悪いことじゃない。人間は何時も不完全だし、間違いも犯す。異形の者も同じだ。だからこそそこに可能性や希望を見出だせるものだろう。世の中に『完全』はあつてはならないと私は想う。」

「……ハッ！いけない、いけない。私とした事がつい説教臭く……。」

だが、花菱は目を輝かせていた。

彼女は若干引き気味である。

花菱

「そんな考えがあるんですか！素晴らしいです！」

慧音

「ま、まあ教師だからな。」

花菱

「すげえな俺感激！益々旅したくなつた！」

何処をどうしたらそんな考えに行き着くのかツッコミを入れたくな  
つてしまつ。

少しため息を吐くと慧音は懐から一枚の紙を渡した。

慧音

「まあ、慌てるな。もしも困つた事があつたならここに書いてある  
所のある人物に会うといい。元の世界に帰れる方法も分かるかもし  
れない。」

受け取つた花菱が紙をめくると一つの場所が示してあつた。その名

は…

博麗神社。

P . m . 14 : 15

街道

それでもつて博麗神社を目指す花菱。歩く彼は誰が見ても分かるぐ  
らい上機嫌だつた。

花菱

「しっかし、理想郷ねえ。その通りの自然と広大さだ。」

それは自分の世界と比べた故の言葉なのか。

彼の世界はアンデットが解放された時点で荒廃していた。

それこそ言い過ぎか、『世界は核の炎に包まれた』と言っていていいぐらいである。

ただ、自分の国は何か治安を保っていたが人間にも悪意を持った人がいて隙あらば殺されそうにもなった。

時にはアンデットと手を組み世界を支配しようとした奴さえいた。

それでも花菱はその楽器の音色とライダーシステムで救える人を救ってきた。

自己満足と言われるかもしれない。しかし諦め切れなかった。生きとし生ける物に生きる勇気を与える為に。

しかし、考えは中断された。目の前の異形により。

花菱

「これが慧音先生の言っていたワームか。」

三匹のワームを見つつケースを木に放り投げて太い枝に掛け、懐からギヤレンバックルと「CHANGE」スタッグビートルのカードを取り出し、バックルにカードを入れる。そして腰に当てると、ラウズカードが腰にまわりベルトになって装着される。

そして両手を前で素早く交差させ左手を突き出し右手でバックル端のレバーを引く。

花菱

「変身」

【Turn up】

ベルトの中央が反転しダイヤのマークが現れるとオリハルコンエレ

メントが彼を通りすぎ仮面ライダーギャレンに変身する。

ギャレンは醒銃ギャレンラウザーをワームに向けて悲哀の籠った声でいい放つ。

ギャレン

「聴かせてくれ。命の旋律を…。」

ギャレンラウザーを乱射し牽制する。

交わしたワームは三方向に別れる。

それを見越してかギャレンは一匹に標的を絞って走り出す。ラウザーのカードホルダーを開いて一枚のカードをラウズする。

【Upper】

その名の通りパンチ力をアップさせるカードである。そして右手でワームをアッパーカットで決めた。

爆散するワームを尻目に逃げようとするワームだがギャレンはそれを許さない。そのまま一体は銃弾を受けて爆散。

最後の一匹はサナギから蟻を彷彿させるアントワームに変わりクロツクアップでギャレンを追い詰めようとする。しかし…

ギャレン

「何も対策無しに来た訳じゃないんだぜ？」

【MACH】

スピードスートの9マツハをラウズクロックアップまでとは言わな  
いが高速の世界に入る。

このままの状況ではワームが有利である。しかし花菱には補える力  
があった。

それは、  
動体視力である。

攻撃をスライディングでかわし、視界のワームを捉えてギャレンラ  
ウザーを向ける。

ギャレン

「そこだ！」

狙い撃ちワームをクロックアップから引き摺りだす。

ギャレンラウザーのホルダーを開き三枚をラウズ。

【Drop】

【Fire】

【Gemini】

【Burning Divide】

そのまま高く跳躍し身を屈伸させるとギャレンが二体に分身。空中  
切りもみ回転して炎を纏った四脚をアントワームにぶつける。

これがギャレンの必殺技「バーニングディバイド」である。

アントワームは爆散。

敵の有無を確認するとギャレンは変身を解く。

そして、『相棒』を再びその背に担ぐ。

花菱

「今のがワームか……。アンデットの様にはいかないか。」

以前の様にはいかない事を悩みながら再度歩き出した。

それから花菱はとある方向を見て喜んだ様相でケースを持ち駆け出す。

花菱

「よし、ここでいいかな。」

街道の道を逸れて小高い丘の大きい木に腰かけると楽器ケースを開けて楽器を組み立てる。大きいベルと長いスライドが特徴的なトロンボーンの完成である。

そしてスライドの手に付いている息を吹く場所、マウスピースに口を当ててチューニングの音B（ベーフラット）の音を吹く。

）  
）  
）

一旦吹き終わると、i O o dの様な物を取り出しその裏のスキマにスピードスートの6ディアサnderのカードを差し込む。

「Thunder」

この機械、花菱がライダーシステムを制作した企業BOARDに頼んで制作してもらったものだ。

アンデットの力を応用して機械を動かす。この場合は音楽プレーヤ

ーを動かす電気の代わりである。因みに、花菱のブレイドの世界は上級アンデットでも複数いる世界なので別のカードを持っているのは当たり前である。

作業を終えると息を吐く。花菱の顔が途端に真剣になる。

花菱

「ふう…それでは、花菱 達也。トロンボーンソロ

曲名 「そこに在るもの」

どうぞお聴きください。」

独り言と思われるかもしれないがこれは花菱風の礼儀と願掛けである。

作曲者と何処かで聴いてくれている人達に対して最高の演奏が出来るように。

そしてプレイヤーを動かし伴奏が流れる。そして楽器を構えて吹く。

♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
…

（曲を知っている人は脳内再生か、そのまま原曲聴いてお楽しみください。）

知らない人は一度でいいから検索かけて聴いてみて（笑）

境内の博麗神社にもその音は聴こえていた。自称「楽園の素敵な巫女」、博麗霊夢は居間でお茶を啜りながらその音を聴いていた。

霊夢

「誰が奏でてるのかしら…この音。」

五月蠅いと言おうとしたが口が勝手に別の言葉を紡ぐ。

霊夢

「切ない…懐かしい…優しい音。」

目を閉じてみればそこには優しい時間。

種族など関係ない。花菱の音色が全てを包み込む。

人里にも、地下にも、天界にも、冥界にも…。

この日、世界は音に満ちた…。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.

## 第十話 紅き城、ダイヤの旋律（後書き）

オリキャラを出した経緯については次回作を作るときの素材集めの一貫であるわけです。

頭であんなこと言いましたが加賀美はキツチリ出しますよ。

爆死しても主人公なんだから。（ウンメイノ）

今回出した曲は東方の二次創作アニメ「夢想夏郷」のOPからです。リーダーの舞風さんが歌っていらっしやるこの曲は同人言えどアニメ共々クオリティが高いです。

曲自体は東方関係なしにしても綺麗でいい曲なので興味がある人は是非聴いてみてください。

第十一話 世界の真実、暴君の妹（前書き）

皆さん。お久しぶりです。いや〜夏休みなのに忙しい。仮面ライダー  
IW終わるよ。ヤバイよお〜。今回は歴代より出来よかった！うん。

それではどうぞ。

第十一話 世界の真実、暴君の妹

P.m. 15:50

紅魔館 応接室

レミリア

「ようこそ紅魔館へ。私が紅魔館の当主レミリア・スカーレットよ。」

日も少し落ちてきた頃四人はレミリアと対談していた。二人は目の前の小さい吸血鬼に只驚くだけであった。しかし、誰もが見たとき思う。

加賀美

（イメージしてたのとは…）

日下部

（違うね…）

それもそのはずピンクのドレスに帽子を被った吸血鬼など外世界の住民の頭にはないからだ。

レミリア

「ふふふ。ホントに吸血鬼か、って顔してるわね。無理もないわ。でも私は生粋の吸血鬼よ？翼もあるわ。」  
背中から黒い翼をちらつかせて言う。

おお、と二人は感嘆し始めて見た吸血鬼をその頭に刻んだ。一方チルノとルーミアは二人の隣で黙ったままであった。

加賀美

「どうした？二人とも。」

チルノ

「なんでもない……」

ルーミア

「なんでもないのだ……。」

明らかに怯えた様子にレミリアは答えた。

レミリア

「そいつらは私の力を恐れているのよ。一介の妖精・妖怪と吸血鬼じゃ格が違うのも当然ね。」

自信気にレミリアは言った。吸血鬼はその血統に誇りを持っている生物だと聞いた事がある。それ故の自信なのだ。加賀美達は納得した。

日下部

「二人とも無理しなくていいよ。」

退室させようとしたがルーミアは日下部の腕にしがみつきチルノは加賀美の後ろに隠れた。

レミリア

「ぶっ！くくく、アハハハハハハハ！」

レミリアは目の前の光景をみて突然笑いだした。四人には理解出来ず、加賀美が不満げになる。

加賀美

「何が可笑しいんだ？」

質問するが笑い過ぎてもがいているレミリア。  
カリスマするどころか最初からブレイクである。

加賀美

「だから、何が可笑しいんだよ!？」

しびれを切らした加賀美が怒鳴るとレミリアは椅子に座り直し話を続ける。

レミリア

「くくく…はあ。失礼、今まで有り得なかった事見たからついね。  
意外だね。貴女達が幻想郷の人間ならまだしも外の世界の人間にな  
ついでるなんて。ホントにビックリ。」

日下部

「有り得ないってどういう意味ですか？」

息抜きに紅茶を飲むレミリアに日下部は質問する。

レミリア

「分からなかったかしら？貴方達、何故幻想郷が出来たか知ってる  
？」

日下部

「いえ…。…もしかして…。」

レミリア

「そう。この幻想郷にいるのは外の世界で言う異形の連中ばかり。私達の本質は恐怖や信仰。これらが外の世界で人間から得られないと私達は存在を保つことができないの。」

加賀美

「えーと、つまり幻想郷ができたのは俺らが異形て呼ぶ存在が外の世界に居られなくなった時の受け皿としてできた…と。」

レミリア

「大方合ってるわ。で、私達を忘れた人間が妖怪と手を取り合ってるのは珍しい事なの。さっきの光景は普通の人間ならしないことだから笑ったのよ。さしずめ貴方達は人間の中でもイレギュラーなんじゃないかしら？」

加賀美

「イレギュラーか…。」

何を今更と思いつつこれが自分達の日常だと心で自己完結した。

レミリア

「まあ、ここを造ったのは紫だからちよつと私達が外の世界に居づらくなった時にできたのはラッキーね。」

咲夜

「私達はまだここでは新参者ですから。」

加賀美

「おわっ!?!?」

背後からの咲夜の声に驚く加賀美。

余談だがここまででチルノとルーミアは疲れて寝てしまったようだ。チルノは加賀美の横に凭れかかりルーミアは日下部に膝枕をしてもらって寝ている。日下部はルーミアの頭を撫でている。

日下部

「なるほど。それにしてもその能力便利ですね。」

咲夜

「それなら、貴方達の技術でも似たような事が…いえ、それ以上の事が出来るのではないのでしょうか？」

妖艶な笑みをしながら彼女は答える。同時に咲夜の指摘に加賀美は驚く。それができる事を知っているからだ。彼の脳裏に過つたもの、それはハイパーゼクターだけである。

加賀美

「俺達も来たばかりだからあまり知らないが俺達の世界を何処まで知ってる？」

レミリア

「全部よ。ここに来た天の道を行く男に聞いたわ。」

意外な答えに二人は更に驚愕する。

加賀美

「天道が来てただって!？」

日下部

「もう一人の僕がこの世界に…?」

レミリアはその反応を楽しむように不敵な笑いを見せる。  
丁度咲夜がティーポットを持ってくる。

咲夜

「レミリア御嬢様。お客様。紅茶をお取り替えします。」

そして真紅の紅茶をカップに注いだ。  
加賀美達は軽く頭を下げる。

レミリア

「ありがとう咲夜。その反応だと天道総司から何も聞いてなかったみたいね。いいわ、教えてあげる。彼がしていることと世界の事を……」

そして語られた驚愕の内容。

この世界とは異なるパラレルワールド。そこにいる『仮面ライダー』達の物語。リ・イマジネーション。

世界の融合。

『ディケイド』の存在。

そしてライダー大戦。

自分達の周りの事よりも信じられない内容ばかりであった。

レミリア

「彼は今その融合と戦争を止めに行ってるみたい。そして融合は私達の世界に及びつつあるわ。貴方達の役目はこの世界の幻想郷の崩

壊を止めること。」

ここでレミリアは話を切り紅茶で喋り疲れた口を潤した。  
加賀美達もつられて紅茶を飲む。

気持ちの整理がつかない。今はそれが脳に木霊する。

流れる幾分かの沈黙。加賀美は顔を上げた。

加賀美

「…天道は何か言ってたか？」

レミリア

「私じゃないけど紫には言ったらしいわ。『貴方達と二人の妹を頼む』って。」

メッセージを聞いた加賀美は何故か安堵の息を吐く。気になった日下部は声を掛ける。

日下部

「大丈夫かな…？」

加賀美

「大丈夫さ。あいつの事だ、俺達を巻き込みたく無かったんだろ。それに…あいつに万が一はないよ。なんだって天の道を行き総てを司る男だからな。あいつの隣にいた俺が保証する。」

この時日下部は加賀美と天道の絆の強さと信じあう強さを知った。そして今まで隣人がいなかった事に二人の関係を羨ましく思うのだった。

加賀美

「で、俺達も頑張んなきゃな。」

日下部

「そうだね。所で崩壊を止めることは具体的に何をするんですか？」  
目の前の吸血鬼は然も当たり前といった面で告げる。

レミリア

「勿論ワームの撃退よ。理由はデイケイドを産み親大シヨッカー。そいつらは怪人の組織だから様々な世界で暗躍してる。怪人のいる世界に現れて結託するらしいわ。おまけに次元を越えて侵入してくる。接触されると厄介だわ。」

なるほどといった顔で二人は理解した。天道は頑張っている事に加賀美は安堵した。しかし、大丈夫だろうかと疑問を持った。

レミリア

「彼の運命は分からないわ。私にも…。」

突然の言葉に加賀美は驚きを隠せなかったが後の台詞に更に疑問が増す。

加賀美

「天道の運命が見えないってどういうことだよ？」

レミリア

「そのままの意味よ。私の能力でも彼の運命は見通せない。まあ、未来予知とは違うからその辺は勘違いしないでね。まあ、大方の原因はあれね…。」

その答えも加賀美は知っている。すかさず答えた。

加賀美

「ハイパーゼクターの時間逆行か…。」

レミリア

「それもあるけど、彼が生まれて来た時から特別な人間だったとは思わぬ。それこそ天の道を…いえ、更に先を行っている。神でもあるかのように…。それに時間を止める事はまだしもそれを自在に操る事は大罪よ。死んだら地獄逝きじゃすまないわね。…あらいけない。随分話し込んだようね。」

窓の外を見上げると真っ赤な夕焼けが顔を照らした。

その眩しさに少し顔をしかめるが慣れてきて緩んでいく。

レミリアの隣に咲夜が来て空になったカップを片付ける。

咲夜

「レミリア御嬢様。時刻的にもそろそろ…」

レミリア

「分かったわ。それじゃあ今日はこちらでお仕舞いにしましょう。長旅で疲れてるようだから四人ともゆっくり休みなさいな。咲夜、部屋に案内しなさい。」

咲夜

「畏まりました。それでは案内します。」

咲夜の案内に寝ているチルノ達を背負って部屋を後にした。

レミリア

（天道の仲間なのに随分普通の人間だったわね…。それにしても彼

等の運命は変化しつつある。操る事なんて出来ない様に…。面白くなってきた。ふふふ。）

自分も部屋を出ていく中で思索しながらレミリアは一人笑う。

P.m. 17:00

紅魔館 廊下

咲夜の案内で長い廊下を歩く。空間を弄っているので距離は普通の屋敷と比べ物にならない。そんな中加賀美は咲夜に話しかけた。

加賀美

「なあ、咲夜さん。」

咲夜

「何でしょうか？」

加賀美

「あ。んゝ俺達に敬語はいいよ。正直得意じゃない…。」

咲夜

「…会って間もないのにため口もどうかと思いますか？」

にこやかにそう返されては困る。確かに彼女の言うことは最もである。

何も言い返せず困り果てる加賀美をみて微笑む咲夜。持ってるランタンの炎がそれを照らし出す。

咲夜

「ふふふ。面白い人ね。分かったわ。私もそっちの方が気が楽だから。」

意外な答えに胸を撫で下ろす。メイドは客に失礼のないように接する者と加賀美は考えていた。社会的にもそうだろう。

その微笑みと声は母性を感じさせる。普通の男性ならドキッとするが加賀美と日下部はそんなこと無かったぜ。(笑)

日下部

「仕事で神経を使うことが多い…と？」

咲夜

「そうね。最近は異変続きでよく屋敷を抜け出してたから。御嬢様も沢山無茶をなされて…。」

やはり人間より何百年生き続けても、見た目と精神はまだ子供な所が抜けてないようだ。咲夜に気苦労を掛けているのがその証拠だと分かるぐらいに。そう思いながら先を進むと廊下の左の一部屋の前で咲夜は止まった。

咲夜

「ここが貴方達の部屋。それと、はい。」

振り返って渡されたのは鈴だった。門番の美鈴が付けていたのと同じものだ。

咲夜

「何かあって呼びたい時はこれを鳴らして。すぐに来るから。」

加賀美

「分かった。ここまでありがとう。」

日下部

「ありがとうございます。」

背中の人を起こさないように軽く頭を下げる。

咲夜

「では、お休みなさい。よい夢を……。後勘違いしない様にだけど、私は人間よ。」

そして咲夜は消えていった。

加賀美・日下部

「マジで?」「」

部屋に入ると綺麗な灯りが付いていた。ベッド二つに机、鏡やクロ―ゼットなど生活するには十分な物が揃っていた。加賀美と日下部は椅子に腰かける。

加賀美

「かあく!疲れた。」

日下部

「そうだね。ここのところ急な事ばかりだったから。この子達にも手伝って貰ってるし。」

日下部が見る方向にはベッドに寝かせたチルノとルーミア。二人は

妖怪といった立場上人間と敵対しなければならぬのに何だかんだ  
言っ手伝つてくれている。

自分達の世界のワームと人間なら普通なら有り得ない事だと、不可  
能だと思っていたことがこの世界では出来た。  
頭をかき加賀美は顔を下げた。

加賀美

「俺達の世界でも…。」

日下部

「…？」

加賀美

「人間とワームが手を取り合うのは…できんのかな…？」

暗い部屋に響く言葉。日下部はそれを聞いて、

静かに笑った。

日下部

「クスクス…それなら僕たちになっているよ。僕が人間の友達のワ  
ーム1号だ。」

加賀美

「馬鹿。お前はネイティブだろ。部類上。そしてお前は人間だ。」

ハハハと笑い返した。そして日下部の頭を小突く。  
やったなとばかりに加賀美の頭を掴みグリグリし返す。  
夕陽は既に沈み満月が空を登る。夜は更けていく。

A . m . 2 : 0 0  
紅魔館 地下室

暗く一切の光を受けない部屋。その部屋に散らかるモノは『壊れて  
いる』。

人形、本、玩具…

そして白骨。

???

「あーあ、これも壊れちゃった…。」

レミリアのとは違うカラフルなガラス細工を吊るした様な翼。

???

「早く新しいのこないかなー？」

フランドール・スカーレット。『暴君の吸血姫』は今日も全てを壊  
し続ける…。

A . m . 7 : 0 0  
紅魔館 部屋

窓から指す光。朝焼けの日光は目覚ましにいい。

加賀美は目を開けるとベッドから起きて、欠伸しながら身なりを整  
えた。片手はチルノがコアラムみたいに捕まっている。そして隣のベ  
ッドで寝ている日下部を揺する。

加賀美

「日下部。朝だ。」

日下部

「ん…ふあゝ、おはよう。」

起こした瞬間気付いた。隣で寝ているルーミア。その服が見事に胸元からはだけていた。

加賀美

「お、おい。日下部。」

日下部

「何…いや、これは僕じゃない…。とりあえず直さないとヤバいね。」

慌てて直そうと服に手を掛けた…と同時にルーミアと目があつた。

ルーミア

「総司…エッチ…」

赤らめた顔をまじまじと見てしまう。更に追い討ちを掛けるが如く…

咲夜

「おはようございます。失礼します。」

扉を開けた咲夜

目の前のはどう見ても日下部がルーミアに覆い被さっていた。驚きを隠せず一言。

咲夜

「それは…犯罪だわ…。」

ピシッ！！

次の瞬間碎け散った。

落ち込む日下部を引き摺り咲夜に案内されたのは食堂。先客がいたようだ。一人はレミリア。そしてもう一人は紫色の髪にパジャマの様な格好の女性。手に本を持って読んでいる。

レミリア

「おはよう。よく寝れたようね。紹介するわ。彼女はパチュリー・ノーレッジよ。ここの大図書館で本を読んでいるわ。」

パチュリーが立ち上がり加賀美達の前に来る。背はそんなに高くなく下から見ている。

パチュリー

「貴方達がライダーシステムの人ね。噂は聞いているわ。妖精達と仲良くしてるそうね。とりあえず、よろしく。」

差し出された手。互いに握手すると、既にテーブルの上は様々な料理で彩られていた。

レミリア

「さて、朝食にしましょう。」

チルノ

「いただきますーすー！」

早速がつつく？。  
遅れて他メンバーも席に座り食事を始める。

加賀美

「これうまいな！」

ルーミア

「総司。あーん。」

日下部

「う…あーん。」

レミリア

「コラそのろけない。ってそのエビ私だよ！」

チルノ

「早い者勝ちだよー！モグモグ。」

レミリア

「吐け！吐き出せ?!」

チルノ

「言ったな！食らえ！」

レミリア

「何するのよ！」

パチュリー

「静かにならない…。」

咲夜

「こう賑やかなのは久しぶりですね。」

パチュリー

（ストップパーが誰もいない…ハア…。）

因みに、美鈴は…

美鈴

「もう…止めて…咲夜さん…むにゃむにゃ…」

美鈴は犠牲となったのだ…ストーリーの犠牲とな…。

食後…

レミリア

「さて、加賀美に日下部。貴方達にやってもらいたい事があるわ。」

加賀美

「やってもらいたいこと？」

レミリア

「加賀美は私と一緒に来てちょうだい。日下部はパチエと一緒に図書館に行つて。」

日下部

「分かった。ルーミアもいいかい？」

パチユリー

「構わないわ。」

食堂から三人が抜けていった。

残された加賀美とチルノは互いの食器を重ねている。

加賀美

「で、こっちもチルノ連れていくけどいいか？」

レミリア

「いいわ。ただし、貴方の仕事はハードだから連れていくのは良くないかもね。」

加賀美

「だよ。大丈夫か？」

チルノ

「いくよ。あたがいるからには…え〜と何だっけ？」

加賀美

「大船に乗った気分でいろ、だろ？」

チルノ

「そう！それぞれ…馬鹿にすんなあ！」

顔がむくれたチルノは氷を加賀美の頭に落とす。

加賀美

「痛い！てか、そんなこと言ってぐえ！」

もう一発。

加賀美 side

咲夜とレミリア同伴で加賀美達は現在暗い地下室の階段を歩いていった。光は一切入らない地下室に何がいるのか、その様なことを考えながら歩を進める。  
そして辿り着いた牢獄。広いスペースにはガラクタと化した人形やらが積んであった。

レミリア

「貴方達の仕事はこの中にいる妹と『遊ぶ』事。」

加賀美はその言葉に一瞬目を開いたがすぐに聞き直した。

加賀美

「妹を牢屋にってどういう事だ。」

レミリア

「……………」

言い返せないレミリアを見て何かしらの事情があると察した。昔だったら激昂していたが年月が立つて物事が冷静に見れる様になった。

加賀美

「…納得できないけど今はやるから今度聞かせろよ。」

レミリア

「ごめんなさい…。」

隣で咲夜は施錠された鍵を開けた。

咲夜

「では、お願いします。暫くしたら様子を見に戻って来ますので。無理しないでくださいね。」

加賀美

「大丈夫だ。チルノのいるしな。」

チルノ

「え！？…あ、ん〜とそうね。あたいが何とかする！」

頼もしい声が地下に響くと不安げな咲夜の顔も緩む。  
そしてレミリア達は階段を上がっていった。

チルノ

「加賀美。この中のやつ暴君って呼ばれてたの聞いたことある。」

加賀美

「暴君…か。まあ、入らないと分からねえから行くぞ。」

チルノ

「うん。」

扉を開け中に入ると部屋の中央に子供がいた。

加賀美

「君は誰だ？」

フレンドール

「誰？珍しい…人間だ。あと雑魚妖精か。私はフレンドール・スカ  
ーレット。」

ねえ、私と遊んでくれるの？」

加賀美

「遊ぶって何で遊ぶんだ？」

子供に語りかける感じで喋る。同時に歩み寄る。加賀美が交番勤務  
で子供を相手するのによく使っていたやり方だ。  
しかし、フレンドールからの突然の殺気に凍りつく。

フレンドール

「モチロン弾幕ゴッコよ…。カンタンにコワレナイデね!？」

紅の弾幕が目の前を覆う。

チルノ

「ひい！加賀美！」

加賀美はすかさずガタツクゼクターを呼び出しベルトに装着。

加賀美

「変身！」

【HENSHIN】

マスクドフォーム時の両肩に付いてるガタツクバルカンで弾幕を撃

ち落としていく。  
隣でチルノも弾幕を連射。中央で爆発を起こしながら膠着状態になる。

フランドール

「アハハハハハハ！ツヨイねお兄さん！！楽しいワ！！」

弾幕を連射しつつ笑うフランドール。加賀美は仮面の下で苦虫を噛み潰した様な顔になる。

ガタツク

（バルカンの連射速度と互角！？どんだけ速いんだ！！）

目の前の弾幕の対処を考えて加賀美は言い放つ。

ガタツク

「やめろ！何故こんなことをするんだ！」

フランドール

「退屈だからー！！」

禁忌『レーヴァテイン』！！」

スペルカードの発動。フランドールの手に紅蓮の炎を纏った剣ができ発射していた弾幕ごと切り裂く。リーチが長くガタツクごと吹き飛ばした。そのまま壁に打たれる。

チルノ

「加賀美ー！！」

崩れる瓦礫から即座にガタツクが飛び出す。

ガタツク

「いてて…だから何でだ！遊ぶなら殺しあいなんてする必要ないだ  
る！！」

フランドール

「そのナニが違うの？私にとってそんなの同じよ！！」

狂気の笑いの消えない顔でレーヴァティンを振り回しガタツクは紙  
一重でそれを避け続ける。

フランドール

「ふふふ。これは避けられるかなー！禁忌『フォーオブアカインド』  
！！」

フランドールが四人に分身してガタツクを襲う。長剣のレーヴァテ  
インを避けようとするもリーチによる制圧性×4で苦戦する。

ガタツク

「くっ！！」

だがガタツクも策が無いわけではない。わざと四方に撒いて中心に  
集めると先に仕掛けた二人の攻撃を回避してレーヴァティンをぶつ  
けさせた。空中で一人の背後に回るとガタツクはバルカンを乱射。  
二人は攻撃に当たって消滅した。

残りを倒すためにゼクターレバーを引く。

ガタツク

「キャストオフ！」

【CAST OFF】

【CHANGE STAG BEETLE】

マスクドフォームからライダーフォームへ。吹き飛んだ装甲で残りの二人を吹き飛ばした。分身が消えたことを確認すると再び質問を続ける。

ガタツク

「じゃあ、君に何があった！何が君をそうさせるんだ！答えてくれ！！！」

ガタツクの全身全霊の叫びにフランドールは剣を止めた。

フランドール

「何でそんなこと聞くの？貴方には関係ないでしょ？」

ガタツク

「それでも俺は聞きたいんだ。君の過去を。レミアアと何があったかを……。」

フランドール

「……面白い人間ねお兄さん。いいよ。私の事知りたいなら話すよ。」

フランドールは床に座り語る。

フランドール

「私の能力はありとあらゆるものを破壊する程度の能力。この能力

はモノなら何でも破壊できるの。全てのモノには目があるの。そこを操ってギョツとしてドカーン！ってできるの。これがそれ。」

目の前の人形に向かって右手を開いてそれを握る。すると人形は塵になった。

フランドール

「この力のせいで私は幽閉された。あいつ…レミリアは私の力を恐れてたから。でもそれだけじゃないのも分かった。私も皆に迷惑かけたくなかったから。でも、暗い地下室は退屈で…最近は何に出られるけど…でもつまんなくて。」

加賀美はあの時の悲しい顔を理解した。本意で無くてもやらざるを得なかった。それでも大事な妹を幽閉するのに耐えられなかったんだろう、と。フランドールも本当は壊したくないのかもしれない。しかし、同時に力の事を何も教えようとしなかったレミリアに腹が立った。一番近い者がやらずして何故閉じ込めたのか。主観的な意見だが。

加賀美は変身を解くとフランドールに近づきしゃがんで頭を撫でる。

フランドール

「え…？」

加賀美

「フランドール。壊したいって思ってるなら直ぐに俺を壊していいでも聞いてくれ。確かにフランドールの力は強大だ。だけど、少しでも壊したくないって思うなら…その自分の弱い心に打ち勝て！それで力をコントロールできるはずだ。」

フランドールは困惑する。そんなこと思ったことも無かったから。

そして何より人間に言われたからだ。

フランドール

「でも、自信ないよお…皆を傷付けたくない…。」

加賀美はにこやかに話しを続ける。

加賀美

「大丈夫だ。フランドールが心を強くしようとする努力があれば。何かあつたら俺が止める。約束する。それに外の世界は楽しいんだ。勿論辛いことや悲しい事もあるけどフランドールには色んなのを見て貰いたいんだ。ずっとここにいてなんて悲しすぎるだろ？だから俺が連れてってやる！」

どうだとばかりにサムズアップしながら言う。するとフランドールは涙目になりながら加賀美を見る。

フランドール

「ホントに…？お外に出ても…いいの？」

加賀美

「ああ。だからここにいても今日限りだ。独りは辛かったな。もう大丈夫だ。」

フランドールを抱き抱える。力が強いのに華奢で柔らかい。そしてフランドールも加賀美に抱きつく。初めは加賀美を壊したくないと手を握って無かったがだんだんキツく、でもちゃんと力加減の効いた抱擁だった。彼女の知らぬ間に力はちゃんとコントロールできていたのだ。

フレンドール

「うん…ありが…とつ…ふええ…ええん…」

加賀美

（君にもこうなって欲しかったなあ…マコト君。）

かつて心を交わし自身を庇って死んだワームの子を思い出す。

T o b e c o n t i n u e d …

第十一話 世界の真実、暴君の妹（後書き）

加賀美

「どうした一体？」

作者

「いや、一種のスランプっつーか。」

日下部

「設定にしちや無理ありまくりだよな。ディケイドの話含めて。しかも適当。（苦笑）」

作者

「そんな高度な設定浮かばねえよ！（血涙）てか眠い！お前等も俺の事笑ってんだろ…わらえよ…どうせ俺なんか…。」

加賀美

「ダメだ…グレた。」

日下部

「何かフラグが立ってばかりだけどどうなるの？」

作者

「そんなの適当適当。もうフランやらチル、ルミヤお持ち帰りしちやえYO！」

日下部

「ダメだこりゃ。じゃあ、次回まで…。」

全頁

「アリーヴェデルチ（さよならだ）！」

## キャラ紹介（前書き）

どうも。超久しぶりの更新です。まだ本編は出来てないので暇つぶし程度に見てください。

今回は主要キャラ（ライダー勢）の紹介です。

## キャラ紹介

加賀美 新かがみあらた 仮面ライダーガタツク

今作の主人公。ワームとの最終決戦の後、東京タワーの下警官をしていた。そして決戦の後に姿を消したガタツクゼクターが突如現れる所から物語は始まる。

基本的に以前と変わらず仕事熱心で熱血だが、天道達と関わり身心共に成長したようだ。天道の妹ひよりの件もあってか人間でない異形にも接するようになった。さらに小さい子の面倒見が良いお陰かチルノなどの幻想郷の妖精とも上手く話ができる。

日下部 総司くさかへそし 仮面ライダーダークカブト

今作のもう一人の主人公。カブトである天道 総司に擬態したネイティブであり敵であったが最終決戦時に天道をワームから庇い爆炎に消えたと思われたが、スキマ妖怪の八雲 紫により幻想郷に送られた。元々別の人間であるがゼクトの実験台にさせられ現在に至る。長い間幽閉されていたため感情が欠落していた。

幻想郷では妖怪のルーミアと遭遇し接点は無いがひよりの面影を浮かべながら接していき徐々に感情を取り戻していく。

元々名前すら忘れていたため擬態した天道の旧姓から日下部総司と名乗っている。サッカーなどが得意である。(中の人的な意味で)

影山 瞬かげやましゆん 仮面ライダーパンチホッパー

元ゼクト隊員でザビーの資格者だったが、ある日組織を追放され既に

追放されていた矢車 想に拾われ地獄兄弟として路頭をさまよっていた。ゼクトが配布したネックレスによりネイティブとなり、矢車によって倒された。しかし、何故か半死半生の身体で冥界で目を覚まし閻魔の四季映姫・ヤマザナドウの裁判により白玉楼に送られた。やさぐれていた性格も映姫の説教により徐々に丸くなった様子。ここだけの設定で料理が得意である。

作者のお気に入り兼魔改造キャラ、そしてリア充筆頭（笑）。やっ  
てしまった感があるがツッコんだら負けである。

華菱 達也<sup>はなびしたつや</sup> 仮面ライダーギヤレン

ディケイドの影響で誕生したり・イマジネーションの世界、複数あるブレイドの世界の住人。これまた紫の好奇心により幻想郷に落とされた。オリジナルの橘 朔也とは違い高校3年と若くアグレッシブで人懐っこい性格である。

音楽を趣味にしており黒のケースのトロンボーンをいつも担いでいる。その気になれば何処でも演奏するほどである。

彼の世界はアンデットが人間と共存している世界であるため怪人と  
の接し方が上手い。それと同時に命を狙われた回数が多いので、殺  
気など人のオーラを読むことに慣れている。

## 第十二話 フリーダムな二人 家族の絆（前書き）

これをご覧になってる皆様、長い間待たせてすみませんでした。自身のスランプやら仕事やら地震やらで更新が遅れました。

今回の地震でお亡くなりになられた方のご冥福をお祈りします。被災された方に自身は節電や募金しか出来ることはありませんが、この小説が少しでも皆様の笑顔に繋がれば幸いです。被災してない人達も今ある限り命を大切に頑張って行きましょう！

それでは東方鋏速録、第12話ページは少ないですがどうぞ！

第十二話 フリーダムな二人 家族の絆

P . m . 1 3 : 0 8

幻想郷 上空

霊夢

「……………」

昼下がり、空を飛ぶは楽園の素敵な巫女（自称）博麗 霊夢。異変がなければ余り外に出ることがない彼女が向かう先は綺麗な旋律が流れたあの丘。物好きがやっているとさえ聞き流せた。しかし、何故か気になってしまった。体が勝手に動いた、そう言える。

霊夢

「（ホントに私らしくないわね。なんでかしら…）あ、あそこかしら。」

再度自問自答をしているといつの間にか目的地についた。そこにはまだ大人には程遠い優男が一人手に持った楽器をケースにしまっていた。

達也

「ふふふん ふんふん ……」

上機嫌な鼻唄を鳴らしながら片付けるその様はとある不幸な人も呆れる所か羨ましくなるぐらいである。それを上空から少し眺めつつ霊夢は男の前に降り立った。

霊夢

「さつき聞こえた音楽は貴方が？」

達也

「うん。そうだけど…あ、もしかして演奏聞いてた？」

気になるところはそこなのと心でツツコミを入れる。

変ではあるが悪い人間ではなさそうだ。

霊夢

「ええ、聞いてたわ。綺麗な音を出すのね。」

自分でも思う素直な感想だった。普段音楽に関心を示さない霊夢が言うのだ。彼の演奏はそれほど上手かったのだろう。それを聞いた彼は安堵と喜びが入り交じった顔をしたが帰って来たのは意外な言葉だった。

達也

「良かった。こんなのを聞いてくれてありがとう。」

自分の音を「こんなの」と言い出したのだ。霊夢はムツとした。

霊夢

「貴方ねえ。私が聞いてここに来たのにこんなのはないんじゃない？」

達也

「え？それってどういっ…」

一気に虫の居所が悪くなった霊夢は返事すら遮る。

霊夢

「このワ・タ・シがここまでできたの！もっと自信持ちなさいよ！それでも演奏家！？」

彼女自身は自分の性格を自覚しているつもりだった。だからこそ自分を動かした彼は凄いとりたいのだろう。それが伝えにくくてこうなってしまうただけである。

霊夢の一方的な言い分を聞いて達也は頷く。

達也

「ごめんね。今度から気を付けるよ。聞いてくれてありがとう。喜んで貰えて嬉しいよ。」

霊夢

「分かればいいわ。所で名前、聞いてないわね。」

達也

「ああそうだった。俺は華菱 達也。君は巫女の様だけど…もしかして…」

霊夢

「そうよ。私は博麗 霊夢。幻想郷の博麗神社の巫女よ。」

遅れた挨拶の後、達也は懐からメモ用紙を取り出した。

達也

「博麗神社…やっぱり君だ。実は君に用があつて博麗神社に向かう途中だったんだ。」

当の本人は思い当たる所が見つからず首を傾げる。

霊夢

「私に何の用？」

達也

「まあ、格好を見ての通りなんだけど、俺はこの世界の住人じゃないんだ。で、元の世界に戻る方法を探して人里の慧音先生に教えられてここに来たってとこ。」

霊夢

「（慧音が…そういう事）なるほどね。とりあえず、神社に向かいましよ。話はそれからね。」

達也

「分かった。直ぐに行こう。」

話が付いた所で達也は片付けを終え、ケースを担ぎ立ち上がった。

霊夢

「因みに、貴方は飛べるのかしら？そっちの方が早いんだけど…。」

「

普通の人間は必ず無理と答える質問は仮面ライダーである達也には問題ない事であった。ニコニコ笑いギャレンバックルにラウズカードを入れ装着する。

達也

「生身じゃ無理だけどこいつなら可能かな？変身！」

【Trun up】

バックルのレバーを引き変身する。霊夢は目の前の現象に目を丸くする。スキマ妖怪はまだ博麗の巫女には仮面ライダーの情報伝えてないようだ。

霊夢

「…何それ？」

ギャレン

「また後で詳しく話すよ。それより行こう。」

困り気味な彼女を急かす様に達也は左腕の強化機器「ラウズアブソ―バ」に二枚のカードを入れる。

【ABSORB QUEEN】

【FUSION JACK】

音声が鳴り響くとギャレンの装甲は色鮮やかな装飾になり胸部に孔雀のレリーフ、背中のおりハルコンウイングが緑色を放っていた。達也は仮面ライダーの能力を初めて戦闘以外で使ってる事に内心いいのかとツツコミをいれた。そして二人は飛び立つ。

P . m . 1 3 : 2 2

博麗神社 居間

霊夢

「ふうん、仮面ライダーね…。」

達也

「そう。それで犯罪を犯したアンデットを封印するのが俺の仕事。」

二人は居間でお茶を飲みながら仮面ライダーについて話をした。職業として機能している仮面ライダーは名前を聞けばヒーローっこをしているのかと思えば違った。アンデットは妖怪と共存した世界で、犯罪者を捕まえる関係は幻想郷のシステムに似ている。彼女自身が使命感、ましてや仕事として異変解決をしているわけではないが違いはそれぐらいで似通っている。霊夢はその意味で達也に親近感を覚えた。

達也

「それでアンデットは呼んで字のごとく死なない。そこで弱らせてこのカードに封印するんだ。」

取り出したのは以前の戦闘で使用したラウズカード。ギャレンが主に使うダイヤスートのカードである。因みに、この時点で達也は全カテゴリーを揃えてある。

霊夢

「ダイヤのマークって事はトランプが起源なのかしら？」

達也

「いや、トランプの元がラウズカードさ。この発祥は約1万年前らしいよ。あと、その絵面が出てるのがアンデットが封印されてる証拠。」

気の遠くなるような大昔にトランプができていた事にふーんと霊夢は頷く。再び絵を見る。人間よりも力を持った存在がその札に封印されている。だが、パワー自体は霊夢でも感じ取れるぐらい溢れているのが分かった。長らく神やら妖怪達と一緒にいるからだがそれとは違った力を感じ取った。

達也

「アンデットは総ての生物の始祖なんだ。勿論俺達の祖先のヒューマンアンデットもいるよ。」

「…所でここに来た目的なんだけど…。」

楽しそうに語った達也は真剣な顔で話を変えた。しかし、勘のいい霊夢は彼がここに来た目的を分かっていた。煤っていたお茶から目を離す。

霊夢

「ええ。どうしたら元の世界に戻れるか、でしょ？とりあえず結論から言わせて貰うと…。」

言いつらそうなのか一息置く。

霊夢

「今は貴方を元の世界には帰すことはできないわ。」

達也

「…へ？」

P . m . 1 2 : 3 0

紅魔館 加賀美の部屋

時は1日進み加賀美はレミリア、フランと一緒に部屋にいた。フラ

ンの心がここまで廃れた訳を聞くためである。

レミリア

「ごめんなさい。ここまでして貰って。」

加賀美

「最初はどうかと思ったけど話が通じて良かった…。一步間違えれば死んだぞ…。」

呆れと戦闘の疲れで出た溜め息はそれは深いものである。

そして横では1日前自分を粉々にしようとした張本人が座っている。加賀美の説得を聞いて檻から出たとはいえ、自身を閉じ込めた相手を目の前にして凝視出来ないのは無理もない。真相も知らずに何百年も幽閉される…人間には到底想像がつかないが、人間ならば精神の一つや二つは腐るだろうと加賀美は思う。

フランの頭を撫でながら加賀美はレミリアに事の真相を聞く。

加賀美

「で、こんなことした理由はなんだ？」

レミリア

「それはその子の能力が一番関係してるわ。」

この子が生まれたのは幻想郷に来る前、その時にはもう能力は発現していた…。総てを塵に変えてしまう能力…私でも止めるのは難しいし同族で殺しあうのは止めたかったから私はフランを幽閉した。それから外界から幻想郷に来て…それでもこの子を閉じ込めた。ここのルール、『殺』があれば追い返されるのは目に見えてるのよ。それに吸血鬼としてのプライドもね…。弱みを見せる訳にはいかなかった。

それでもたった一人の妹をひとりぼっちにするのは辛かった…。」

話が途切れししばらく沈黙が流れた。見た目は幼い吸血鬼二人は悠久の時をどれだけ悩み苦しんだか、人間の自分では何も言うことが出来なかった。

だが、フランの思いを無駄にできない。加賀美は言葉を紡ぐ。

加賀美

「…俺は二人に仲良くしてもらいたい。だってそうだろ？ たった二人血の繋がってる姉妹だし…」

確かに過去じゃ出来なかった事かもしれない。でも！今は違う。自分の心から本音を言ったんだ。力の事だって教えられる。これからは変えられる！」

所々強気な発言に必死さが垣間見える。それに対して口を開いたのは隣にいるフランであった。

フラン

「ねえ…なんでそこまで必死なの？ 元々は関係ないのに…」

加賀美

「……………俺は昔弟を化物に殺された。」

フラン

「え…？」

加賀美

「一緒に野球するぐらい仲、良くってさ…可愛いやつだったんだ。だけど、ある日突然行方不明になって…そして次にあった時に…化物に擬態されてた…」

その時の俺はなんも力が無くて殺されかけた。天道が助けてくれな

きや死んでた…。」

自身のトラウマを語って顔を上げた。

加賀美

「だから、失ってからじゃ遅いんだ。たった一人の家族なら大切にしないと、取り返しがつかなくなる前に。俺は出来なくても、二人は…これから出来るだろ？言いたい事も言えるだろ？それに俺達は似てる。だから、聞いた時ほっとけなかつたんだろうな…。」

あの時の事を少し思い出す。弟「ワーム」を倒す直前の会話。救おうとして救えなかつた事を。自分の非力さに泣いたあの日々を。

レミリアはそんな加賀美の姿を見て何とも言えない気持ちになった。フランは加賀美を見上げる。その目は暗い話をしたのに輝いている。決意に満ちた目だった。

フラン

「…私は吸血鬼だよ？なのに何で…何で…う…ひつく…。」

今まで思つた事のない感情をフランは目から流していた。その『涙』は悲しさから来るものではない。嬉しいのだ。加賀美と言う人間が自分を止めてくれたのが。

その様子を加賀美は見て再び優しく抱き締めた。

加賀美

「辛かつたな。だけど、大丈夫だ。俺が友達だ。これから頑張つていこう。」

レミリア

「何私の目の前でイチャイチャしてるのよ。」

不機嫌そうなレミリアの突っ込み。加賀美は自分のしてたことに気づき顔を赤くする。

加賀美

「ち、違う！俺は別にフランをそんな目で……」

レミリア

「ロリコン……」

加賀美

「なん…だと…?」

核弾頭が落ちた。

良くも悪くも美しく残酷な幻想郷であった。

レミリア

「でも…ありがとう。」

本人には聞こえない声で感謝をした。

暫くして

加賀美

「そういや、日下部はどこいったんだ？」

レミリア

「ああ疑似天道ね。彼は……」

少し意地悪そうな顔をして言った。

レミリア

「実験台になってるわ。」

加賀美

「は？」

P . m . 1 3 : 0 0

紅魔館 地下図書館

爆炎立ち込める図書館。火球が一人の人間に次々と襲いかかる。

日下部

「はあ……はあ……はあ……何で……」

ルーミア

「総司ーヤバいかもー。」

???

「待ちなさいーいー！逃がさないわよー！」

日下部

「なんでーじじなるのー！？」

日下部の悲鳴は理不尽な攻撃の前に消えていった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2590k/>

---

東方緻速録

2011年4月15日15時33分発行